竹取翁物語解

首

126
6
104

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
					六

089027-001-0

126-104

竹取翁物語解

田中　大秀／著

M28

DBL-0251

文學士坪内雄藏序
本居太平序
飛驒高山田中大秀著

竹取翁物語解

愛知書肆　松屋平兵衛藏

序

序

竹取翁物語解序

飛騨國高山里田中大秀ぬし。大平のまなびの兄弟なり。その學の道をこれ。世のいとりたつるなり。此解説を見ても。考へぬ事なし。鈴屋のをしへをみな。竹をもとのはらのうちにして。白玉なす五百津彩雲ひかりかがやくあめつち中なり。天地ちはふ皇神の道なまれ。言靈ちはふ言の葉の道なまれ。和歌ゆ。ゆゆしき人なり。杉本なる中なり。

よくいのきらめて。人をもちやしぬ。後の世をもたしん
おのむかし功人ありてしたがひしやうにおもはるる
ふ。京雅波伊勢尾張北四國ふ十五ヶ人。三河遠
淡海伊豆甲斐武邦志義濃奥大やう七國ふ七人。
出雲石見安芸吉備豊國肥の國筑紫やう七國ふ七
人。さて三十人ゆきちまちにいたりて。なとにいりけるかくいなる
ものも紀の中ふ人よりやうにおもはるる。宮は兄弟
ふ新といりけるはしめ新おもひ名ちにふ享和

元年四月のはしめ。此人ちふおのものふ伊勢ふまして
新屋大人ふ学紀学の法いさを伝きつべ。数子
の貧ふもふ。ちくちひてこそまるまつれ。多ふ
きつ言ゆのむかしかちくわのぬしいそぬてまぬ
てよくこひねき給ひしといそるふ。行そのんさし
ふまめ新る法まふ新もきつきめでんやわのあれち新
ちふ京ふいりかちのいちちかくこふ申さむ。文の新て
おくるそ。これ弟よ四條のややるとふ。安田植松やう

はあれふかきこゝろあつめてさ玉ぶたち。此二人ぶも
よくはのこゝろ寄をもとをくへやりける。おのれを三月ぶち
こゝなより出たる事にのぼりて。翁ふ拾ひてもえの屋らさ
ぶけれど。かゝることあて。學ぶきさの盛なりしさ海も。文のあよりも
ふ学きゝてそなりける。そのうゝせちに。日毎ふよるひる
ぶ二度あて。京のみやひをゝちをはゝめて。のちまて
にひらる國〻の人〻。文きつゝへてふりさ人ふてあふ
のほりまゝるをゝへ子。文學の上人さべ。此やゝ〻ぶ。ふ

にのまゝ所やゝゝおひ人おはゝまで。きゝせ拾ひきゝ。
よゝみやゝきゝゝ。萬葉集。源氏のものがたり。古語拾遺。
延喜式の祝詞の巻。詠歌大概。玉匣別巻ちなゝ
ぶりけりこゝふ國〻よりのぼりつゝるも。京ぶ
をゝへ人ものよるひるもおゝこゝ。ぶもはゝあ紙。
そのゆふぶ。一はもおちぶなをひふ巻ぶ海
なりしもけりつゝとのゝ。世ちひてもちひふ一まひ
もかゝることゝなゝいそゝこつめりをゝ。んさ海ぶ

人のおほかる翁を深めたるよしほとへて後。おの
ついてに栖松有信らおのれにかたりたることをいひ
たり。四月十四日雙林寺の會にもいでてまけの歌閑居
郭公。さらに題山家水なくともよみ。五月廿五日の會の
二題。加茂川納涼嵯峨山松なくともよみいでたる
ことども。都日記といふ書も見えたれども。其の深きみち
名を田中紀文といへれども。此人の事をかたりしと見えぬ
人をたづねけむ。此はさきの翁いひてにかくいふなり

けり。翁なくなられて後。文化元年八月より十月
まで。松坂に来居て。太ひらの家にて。鈴屋の教の
書どもをそこばくかきうつしなどせられき。まうで
おのれ。この紀の國にうつりまゐるころほひにも
かよひ来て。三は四日程居せられしことも
ありき。さしてこなたの学のちからなすくにおもへる
ひとはあけるなかに道に志ふかきこともありしぞ。
其の國の惣社者とらふ役あるは。しかるはしもその國の

御社の地をあらし。みその里ちかき荘名神社
のいくさ所にて初はまたかくれたこと。わが
きくへよろこれのれよかくひはのりて。御所加
地あて賞わ。出へて神作紙いつ記まつる色紙由
忠よし紙人くホきやくきのせ。又神代正語ホ
つ記て。帝紀正訓とふをもはくそさとやく思ひ
あちち。土佐日記。巻こ原。此作取なくの解の所為ま
ちやもおのれよかくり作ものあり記。そそ聚解

はちあくみの屋ものも建むのんのまへ家。所ちくし
先はあ所のあやくこ神あるけ化。歌よみ文お
き琴ゆ記笛ふ記みやもおわさホんよ物でこく
ろあの記ど。言山は里の名ものく。はのかこ後
ど。京よりやるのホ遠記所なれど。田舎ど。国中
やこふよおよび世ホひいく。まれひのちの後
いくはもくるど。此ホこ記ちゆ記ちれるよ物
も思ひ所ちまれける。此伊ゆ名よ。かくいとく

けてこれのはしがきとす。

文政十一年戊子十一月朔日

本居大平

竹取翁物語解卷首

飛騨高山　田中大秀　著

竹取翁の物語は諸の物語より出來たるその祖にして殊に古くそれを古事などに引出て法にしたがへる註釋などは形くて年經て契沖阿闍梨の河社にらを書て天竺とつたへし古事どもさまざまに出たるを始めて其後難波の小山儀と云人段々を分ることはやこのに解たる抄と云ものも有たれど抑とは物語よりなれば深き心も不入で讀見ずしては甚安くいとの浅く聞やすくなるを文義なれば委しく心得ずして幾度もかへしてこそ讀味はすれと為まは中々いとよろしからぬ

ゐる限り多く出来て惑ひなどなるも成ゆくめるをそふハ此書もとよ
り詞をいと〳〵省略なるさまなるをうつして寫本に間に脱ることゝ誤まる
屢ありて世くを経るほゝに數ならりぬれどなるぞし。かゝて先つやしか
山ごの抄よみのごのいさゝゝ思よりたる吏どもかつゝ書加へ置かりしをい
ゝし年に秋越中國富山人佐脇大彦主訪来られるに彼抄見をよゐら
ばられ其猶ゝそゝうして見てよりどそゝ〳〵のしつふよ又其のち
訪来る江戸人巨勢健冬さる板本なのゝ世に異なる一巻を持来て其
よみこのをこの互ひ言ひ意ひのげつゝひなどさつるゝ條〻辨得るを猶
世に弘く傳へゝ〳〵此物語をみ見せ人に示さまほゝくて一わり書
きるゝ〳〵ハ文化の九年と云し秋ゝ〳〵其翌年の春に便に本居翁の許に

紀伊國に遣さして見せほゝ〳〵せ又おなじ尾張國なるやに物しける時
そこに秦鈴木翁に思ひし寄ぶ吏書加へ賜らせて見をおゐ
らせつ。さらぬ何〳〵と世のゝふをさつて得ゝ書きゝ絵ぞりゝを吾
徒長瀬俊香ほゝてろに催さるに從ひゝ此秋の末より思起して猶〳〵
考正してかゝハ物しつるにやる

文政九年十一月

◎ 物語ぶとゝ意ぞ〳〵

凡そゝに物語書よりそこゝ侍ぞ〳〵みてゝや吾師本居鈴屋大人に源氏物語の
玉の小櫛といふ書に甚委〳〵云ひゝり此ハ物語ぶと見せと思ふ人
ハ必不讀でハえあるまじけれバ今其片端を取ゝ此に記ゝ諸の物

語のき屬各〻少づゝかゝるさくさるべくなるべくも何をも昔の世に有し事を談る由るゝ或ハ聊のゝ事も有し事を據〻して作りゝ〻もかき或ハ其名をかゝしもし替もしゝかまき或ハ皆ゞゝ作もし又稀〻ハ有しこゝを其侭に書るも有〻やうゝ〻れる中に先多〻ハ作るもなりとて其何なる趣なる物〻て何の爲〻讀物そゝと云う大方物語て世中に有と何る善き事惡き事珍き事可笑き事面白き事哀なる事なゞゝなさまゞゝを書ゝはゝゝ其狀を繪るもかきまゞしゝなゞしゝて徒然なるほゞとの慰めに もし世中に有やうにも心得〻物の哀も知物なりかゝて何の物語も男女なるゝひの事に宗と多〻書るも代〻に歌集ゞもゝも戀の歌に多き〻同し理〻て人情の深〻係る事恋に勝るハ無ゝ事なりゝ

又巻二物の哀と云事を委〻〻云示〻彼物語の殊に行〻とのた筋を論ひ〻凡物語て物の哀知べき便なるよしを喩さるを思べし此物語はゝ其定るゝ赫映姫の容貌に世になゝ美てゝを見〻ハゝちあしよ若〻もも忘も腹立しもも慰さむて形のよきに甚〻感ぜでなりゝ又世界の男子貴あるも賤も戀慕ける中に疎き心淺き人て益なる歩行ハをし無ゝりけるゝて遂に不來なるを猶いと深〻感惑〻ゝも思不正此女不得でハ世に可在ゝと思なりゝ五人の人〻に身をけるゞ〻にしるハ大方に世の男に切なる念の狀を書顯〻し物の哀を令知〻るもなるとさるに赫映姫ハ甚に無なゝ哀ゝの狀をふるゝひゝるハ彼竟原處女髮子、櫻子、なゞゝなるゝひ五人の人〻ゝ身を分方も

なほ〳〵靡（なび）ばやうもなほ〳〵ばかりもまたるにの如くにて見えたる帝の御前
にハ然（さ）〳〵も情（なさけ）なの〳〵草木にいきて文を通ハし今ハとて天の羽衣着
時にも文を獻（たてまつ）るところをきく煩（わづらは）しき身なる由をとこまやかに奏するとむ
げに心なきにハあらぬ由をとこまやかなるになほ〳〵ばこの物語も
物の哀知べきにもとこまやかなるにハ其意をとて讀味べき書なるべきにふ

◎書の名

此物語の名具（ぐそう）にハ竹取物語と云ばかり省くハ竹取の物
がたりと云も難なし此翁をとこ竹取とのと云こと主水帯刀（もとりのたてわき）など
ど云同格なり此物語の中にもとこまやかなるにハ大和物語にも竹
取ごのよにと泣〳〵と云〳〵と歌にもとめりとて多計登理と云ばきこの又多迦
登理と呼べきとのと云論あり六百番歌合の俊成卿の判に云〳〵竹取翁の
更なるにハ両様にもなるべし然而此翁にとりてなるにとりと云へとも
しかるに證據で有べき顕昭陳狀にいはく万葉集竹取翁の更なるにとり
けやとり両説なり万葉にも両点をぐると堀河院百首懐書の題に中納言師
時卿の歌に春岳に登て見るにとりけやとりの〳〵子等に更をぐ此
もふとよまれてゐるにハ堀河院の御前にて令講（こう）哥に彼人なるにとりとよ
まれて別の難も聞ゆる係ハ其説に附て詠ずるにより申しるけとりと
ハ詞ばかりにて彼卿の歌にハ證拠も聞えず又論歌にも出ざる係ば
如只今ハ勝鞭をきゝゐるべ〳〵えみけとりとよまるるにて人にとて證拠
に尋ねるきはゆ〳〵ゐるを云〳〵とゐるを抄の頭書に引て昌慕今按に日本

紀に其所棄竹刀終成竹林故号彼地曰竹屋云々又竪登長屋之竹島とも又竹葉瀬人名是等を思へて竹何と云ばきもあれ多迦と云るぞの古の正訓なるべし譬へば酒を下にあるをバ一夜酒といひ上に置るを酒糟酒皺と云ぞの如し仙覚万葉抄にも多カトリと點されしもよくも此物語も彼万葉に翁の名より出るなりと見えたれバ古風を存して多迦登理と喚べくこそと云るし大秀按にあるなりともあるけるなりぞも云べく聞ゆる中に多計登理と喚て宜かるべきよ先此類ハ言第四音を第一音に轉して下に注ぐる格竹簀金舟稲風雨酒目天食などあるもしあるやあるしまあるぞあるもなるあるぞこのりすぐれてすぐれてからなる山いな穂ふな屋形などを祭はしるふあきらのばきまさのくなくなど竹のむらすげの緒云々と皆中間に之字なる

意なり取ハもひとりかぢとりの類又たちはきとのもりに佩守に同じ是等ハ中間に之字あるべきをあらざれ又今世の言かねほり金掘人をかねほり稲苅人をいねかりと云など業を名としたる皆第一音に不轉を以思へばこそ多迦登理とこそ云べけれ又天ハあめに某あまに某あめ某あま某といひ食ハ豊受姫などよおきとの姫宇賀の魂うけもちの神と種々にも云よ又高津宮に御宇天皇の御製なるハやまと一本菅ハ子もたずたちかあれなましあたら須賀波良ことをこそ須宜波良といはめあたら須賀志賣と一首の内に言を交て須賀とも須宜とも製給へり契沖阿闍梨の云々竹取と名付たるハ万葉十六に昔有老翁號曰竹取翁也云々この竹取ハたかとりぞを訓を昔ハたかとりと訓たるのみ也是を本として名附たりし顕昭 六

百番歌合の時今はあけくれりとよまれたるを判者咎られたるまきれど大和物語よりのこりの云李吟翁の抄又類従本是も同し秋と何遠ハ通はしても苦しのこれぬるやと云れきされで強も拘るばき更も非ざめれを今ハ云則るも従ふ多計登理と喚べく定つそもく落凹物語、源氏物語、など宗くて談る人ハ名もて附れを是も蓬生巻ハ見えたる如くかぐや姫の物語とこそ名付べけ遠と思ふを繪合巻くハ竹取翁くしも云れでハやくより翁の方を名くハ負りんこのし

◎ 佐くれる時代

師玉の小櫛云く竹取物語ハ誰ぞの何時の代ぞ作まりくふをぶのに知られる

ぶも いくく古き物くもくぶ延喜よりハ以来の物とぞくくると云

れくりきれど源氏物語ぞ繪ハ巨勢相覽書ハ紀貫之かゝらもとくれれで延喜の以往ぞり在し物なるべし元来作物語なれば拘るばぞ更くハあくざめれど彼物語ハ作主紫式部のくゆくく心ちくひせくれるる物なれで徒然艸ぞいくふ小野道風朝臣れ書る朗詠集のるぶくひるくハ非で古くより賞翫く時代も似つのくしけどいこて相覽主、貫之主、なぶれ物きくれるよくしぞ云れくれる擦くて作まりと見ゆる寶樓閣經を高野大師の將來まり是ハ不空三藏の譯の方なるべし と云ハ大同の比より後なるばきハ更なり昌憲ぞの抄の頭書云く松浦物語の奥書ぞ貞觀三年四月十八日云くと何り然り紫式部物語の出来まぶれば於やなる竹取と云ひとつの れでハ猶貞觀の比よりも古き物とくるべしと云ひ。時代大氐さるこくなぶくく此奥書ハ不

審〳〵信ぜざることを思ふべし

◎ 作ぬし

此物語ゐなどせしなりと云事もあるべこの〳〵凡く古き物語書ども作者は
もとなきなるはなり。河海抄は竹取翁は古き物語なり作者不知とあるを
此抄は古人の傳說には源順主は所作と云ふとあるどさらぶこのなべ此
書の唐土天竺よりもてりて博聞強記なるべしいかぞくら造得べきと思ふ
るなれど若は順主なりもあるべこのと云人など在けるを聞僻め〳〵次るは
順主の作なるなりと云觸し猥言なるべき有べき。宇都保物語を河海抄は源
順作とあ疑と記されるるもとるし猶此物語も宇都保も順主なるぬ
よしは落凹をも此主の作なりと云は就〳〵落凹物語解は論おきつ皆區

區は文躰異なるなれど同人は所爲なるぬは論をおきても明らかなる分
る〳〵事なるべこの〳〵昌泰は云〳〵河海抄は巨勢相覽一說云巨勢金岡相覽同人
也とあ但如高名錄者相覽猶先代人也金岡仁明天皇御時人也承和四年九
月五日圖御所繪とあて。花鳥餘情に巨勢相覽者金岡之子とあ金岡寛平時
人爲其子則可爲貫之同時人とあり大秀云相覽主の事何もとも役ぞる
るる人なるべし承和四丁巳とあり寛平元巳酉おく五十三年なり貫之
主齒の事二說ありて詳なるべ古今目錄によれば元慶元出生なるて寛
平元年は十三歲なり又一說は元慶八の生と云ふ然弄花抄は云く金岡
は相覽主を金岡主の子と云る大氐同時は當るべし
子とあ除目成文抄は昌泰二年二月除目執筆時平公讀岐少目役八位下巨
勢朝臣相覽畫師云是は寛平元より十一年順の作なるべは相覽貫之など
後なりて歲在巳未なり
ごの書ふりとそ云ばこのべ昌泰延喜の比既は舊なる物語なるべ相覽貫

之れゞの書〳〵より〳〵云なるべし。抄頭書ゝ云

◎ 擬ぶこと

此物語ハ唐土天竺の書ども〳〵奇〳〵珍らしのなる事共を集取〳〵作まり始て寶樓閣經よりの得ぶるにを得ずして〳〵ふハ云〳〵ゝ書、月宮殿の事ハ某經なゞ〳〵思〳〵とと云〳〵を本居翁の許ゝ見を參らせ〳〵ばハ赫映姫ゝ始終ゝ石の鉢、火鼠ゝ裘、珠の枝、なゞ唐土天竺の物名どもなれど彼所の書に拠まりと云る〳〵ことなる〳〵ど此の故事ゝも此彼似ゝる事も有ぬべし。抑赫映姫ゝ竹中より現出ゝ天に昇ゝ〳〵ふ事なゞ今世〳〵ゝ傳ゝ〳〵諸國の風土記なゞ〳〵ハ能似ゝる事も有しなるべし其不傳〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ遺る中ゝも山城風土記の加茂大神の始終ゝ古事記、書紀、万葉集、なゞ〳〵も是ゝ似ゝる事多ぞこのしと云遣ゝ〳〵ばハ解の中ゝ書入ゝ〳〵る故事ゝ言長きをも抜出〳〵此卷ゝ末ゝ載〳〵るになり

◎ 凡例

此ふこハ物語の出來ゝ〳〵もいべを皇國言を其言の侭ゝ一言もゝ〳〵の〳〵假字に書記ゝ〳〵る凡の書籍ゝ中〳〵ハ〳〵も甚〳〵古き物ゝ〳〵ゝ有〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ハ寫し傳ふふ世〳〵ゝ程〳〵ハ詞をもかき漏し文字をも写誤ゝ〳〵ゝ甚多ぞこのし。清少納言の御許ゝ枕冊子ゝも物語〳〵ゝ〳〵ゝ書なゞすまぶハ〳〵ひ〳〵ゝ〳〵ゝ作者ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ定本ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ書附〳〵ゝ甚〳〵ゝ〳〵ゝ物語の出來ゝ甚〳〵ゝ遠〳〵ゝ當時すら如此

をいとまも幾百年を歴にしふ末世をも。大秀まもふを古代の書籍と云
その巻物も冊子も誤てハ書改る事易のゝざるあれで誤きるも脱きるも
きて置つるふで多のりけまきるハ巻物を紙を長く継ふて置てかりたで
誤きる時中ゝ一葉抜棄る事も煩きゝく又冊子と云物も今世に如く
糸に端の方にてゆきつるハ抜取を煩なるを古ハ厚き紙を中ゝてゆきち
て今俗ムサウトギと云一葉に表裏を書てゝまバ弱しゆりでゝ聊なる誤な
ゝも直し漏ふる字なゝを傍を書加ふるゆを見苦しりたで仕たなく不
知ぬ見ゝて大方ハきて過しつるより世てふるまゝに其いと多く成も
て来よけるゝで有める凡ゝ字形の似ふる或ハ音通なゝて書写の誤
ゝる例ゝも玉小櫛巻四に云きつるでさること
なる又按を今も物書写ゝ試を脱きる事を多ゝ非ぬ事を書添る事てをさ

をさと无もけなるたハきれゝおけを无とゝハあゝ讀継をとり衍と見ゝ
筆に勢ゝてふと書添る事もゝるぞのゝ削去てゝ能て心を用べき事ぞ有ける如此まバ今世に至てハ正し
き本なけたで唯一ゝハ定難き態ゝ而たで此度も得ふる本の限集へ
置て彼よりゝ見よりけまと打頷つゝ先多ゝハ同本の多のふ方を仕を写
本と板本とに中ゝハ板本に方を憑剛ゝ覧ゝ板本はよると又いのりでや
覧きるなゝて強を同類の多ゝも役難ゝて聊も勝ふゝまと思を従ひ又
彼も是も脱きと誤きりと見きふハ止事不得ゝ自己の心もて補も除も
改もちつるハ无負氣もぶれを思よれるをえゝも捨やゝでなん凡ゝ
異本に役ゝも已の私ゝも補も除も改もちつふハ悉皆本文を印を附て
解を彼によりり是を役ゝとこのるきたまで委細を斷おきゝたバ其本

を探て返さば疾返しつぼくなるまさに鮮の格まるづひ〳〵決て誤と見ゆるハ然こゝをもて〳〵ぬも有て〳〵

○諸本と異同あり〳〵改めるるハ傍よ。点をつ〳〵○私に補ひ改つるハ・点をけく○衍まりと見て〳〵削除つるハ其由委〳〵解よとゝわりつ○言重なりて衍〳〵ハ見もる物の〳〵猶ゐしも不除で本ゝ仮なるハ左傍よと点をくゝふ○誤字〳〵ハ見なぐ〳〵猶改難〳〵て斯もあ〳〵ゐと思ゝる〳〵ハ傍よ片假字もて訓ごとのりをあ〳〵るゐ

○脱文と見て〳〵補ぐるゝハ行中よ脱字と志る〳〵つ

今改正ゝゐ〳〵て校ける本ハ小山氏ぐの抄普〳〵世よ行ゝる〳〵板本を始ゆ〳〵て佐野春樹とつふ人ゝ寛政十二年よ校合ゝる本是ハ寫本ゝ〳〵橋本稲彦より御薗常言とつふ人の写傳ゝる本なり其ゝ古き寫本を本行〳〵て安永二年武村美伎ぐの古写本林鮒主ぐの古写本上田百樹ぐ平信之ゆを校合ゝる本又活板本なぐと悉く書入ゝる本なり又健冬ぐの越中高岡よて得ゝりて賚ゝりけるゝ甚古き板本ゝ〳〵よゝて〳〵多のを一冊四十一葉半面十一行ゝ〳〵奥書年記等なし此本健冬死〳〵後津國西宮中川惟幾けゝへ持ゝりゝぐ又羣書類從ゝ本。又文政四年ゝ春難波ゝて得ゝる一写本。などを能考按定ゝ取〳〵本文となつ

○抄本と云ハ小山氏ぐの抄の本文なり是ハ大氐普通板本ゝ同しきけゝゝゐるゝ絶〳〵無〳〵ハあ〳〵ぐ其ゝ○普本と記〳〵て分つ○写本と云ゝ佐野春樹ぐの写本ゝ〳〵ハ本行なり○古本〳〵ハ鮒主ぐの本なり○校本〳〵ゝ百樹ぐの本なり○活本とハ活板の本なり是ゝる写本の傍よ某

某記しるすを取たるなり○古板本とて健冬ごの本なり○類本とて
群書類従奥書に右以織部正秉尹主藏本写以云本校合畢と有り本なり○一本とて浪花了
く得たる本なり○譬へば抄本と写本と同しき類ハ其憑びるべき方
一本を擧くて悉くて不云
○内題て無も有も有り抄本古板本ハ无し凡物語文日記なごた類ひ
いるはしく書たるハ大方も无しきたで外題のまま内ハ題を不
書べき事なり写本ハ内に竹ヤりの翁と物語と題きて今ハ是を取く
外題てつ普本ハ内ケて物語とたのと竹取のと不云ごて惡し凡て
伊勢の物語とたたる物語なごやうの字を讀べし枕冊子に有やし
うしきたものこのたりなるやなごたる知べし。さて翁と云字ハ畧くも

有しのまぬよしハ上に知つ

○河社て契冲阿闍梨に隨筆なり其一の巻に末に此物語の更を記きた
たり皆是を取くたるしつ○竹取物語抄二冊浪花人小山藤原儀天明の
初のこ病の間に著きるまくに齢廿五にて身まかりける由其昆弟入江
昌憙ごの序に見たりきしも若くて漢籍佛書ごも引出たる才賢にりけ
ゆほど推量たて甚もく惜む人なりしのし其頭書ハ即昌憙ごの説なりと
ぞ是も序に記きる是も引たる書も説も用あるて皆たりつ河社に云
或ハ細書に抄に引たり又頭書抄のと不云に云なごて記しつ出書ちのたハ不
記も有と○又師説なごハ其本書に讓て委しく不云も多のと記傳と云
るハ古事記傳なり○日本書紀ハ神武紀仁德紀なごて云つ其天皇の御巻

なり。又宇津保物語源氏物語栄花物語など巻の名ある物ハ源氏の宇都保のみどハ不記ねどに明石巻吹上巻などあるしつ是らハ巻名ども能人の知く紛なく於でなり。又枕冊子八の五丁なし記せるハ北村季吟翁の春曙抄より引出せるなり源氏も湖月抄に従て巣の次第をあるしつ

○凡て詔云曰云白云などある文を訓ニハ先始に詔曰白とよみて其云云の語は終に又再とのりたまふとしてまをすとまをしたまふなどて云辞を訓付るぞ古語の格なる。古事記に天忍穂耳命詔之豊葦原之水穂國者伊多久佐夜藝弖有祁理告而まる出雲國造神賀詞に乃大穴持命乃申給久云て申天古今集に親王云けるを狩して天の川原に至と云ことを題をよみて盃をさせと云ければ。土左日記に楫取の云やう黒き鳥のもとに白き浪をよれとぞいふ。玉蔓巻に此男ども召よりくかたらふ吏ハ思さまに成なぞ同じ心に勢ひをかそほど吏などかたらふにぞありと師記伝巻一いと聞えたり此物語こそに此格多く赫映姫のたまはく云てとのたまふ翁いはく云てといふなどあるを後の物語共にハ此格稀なく上にのたまはくいはくと云言なくて其君云てとのたまふ其云てといふなどらるもかくて上にあるハ詔云申給久申久云久語久云やうかたらふ吏ハなども云格なるを此物語にたるまふ云ていふ云てまうし云てなどのるも多し是ハ下へ引続き甚聞苦し此餘の物語ニハ甚稀なり。落凹物語巻三に三条家に従ひいふ時男君女君に申給ふ人によれ所えさせけるを此十九日に徒らせ云てらるれけく。又巻四ニ師四君を迎る吏を勧めてあちのたまふ罷下るべき程甚近し

江戸日ハ六七十餘日よりなんみとのゝまへぶそ。總角巻よ姫君宇治大君思し煩ひ辨の參まるにのゝまふ。年頃も人よ不似の薫君の御心よせとのゝ云ひ續ぐ程でゝ。是ハ甚稀なる吏形り。かゝ此書うもの。ゝまたゝいはゝハ多くのゝまふいふとゝ方ハ少なし。又いふと一本よ何るを又一本ゝハいたゝくと何る類ひも多のり。強く接よ是ハ申云など字ゝ書いるを假字よ写ひたまゝいふなど書つる誤の。翁と五人の人ゝとゝ詞ものゝまへぶそと有べきを。申をバと云きをもいべぶ。などゝもきるあ何るゝゝの猶よくゝ考べし。

○此書ゝまゝゝハ先本文を幾度もかへゝ讀ぶよゝ次よ附錄の古吏を其段よかゝまとのへ其解を見ゝ言ひ意をさゝゆゝり文の趣を知べし故今心得安ゝのゝまゝの爲ゝ假よ名目を設ゝ九段ゝふのゝ。つるよなゝ。

巻一
○赫映姫みひるゝ
○妻ゝ

巻二
○佛の御石ゝ鉢
○蓬萊ゝ玉の枝

巻三
○火鼠の裘
○龍の首ゝ珠

巻四
○燕ゝ子安貝
○御狩の行幸

巻五
○天の羽衣

是ハ人ゝの見安からむ為まゝ〳〵物しつるハ元来かゝる事ゝハなき思ひそ。さるにしバ手よゝかゝまゝ人なみに此本文を取ゝ美麗しゝかゝきまゝとせで始より終まで一連に書續にて先の段ハ一行の半に終るゝも次の段の始を改ゝ頭に上ゝハ書べこゝにしたなきまゝと今改ゝる印なゝハ附みゝ侍しさて凡ゝ解ぶことゝ云物ハ其段ゝ中にも又條ゝ分て註釈かゝ隔て文詞ゝ〳〵このゝまゝにハ大肯ハ得ぬるゝをしバ今も本文ごとのゝ書出まゝ引しゝまゝど書の甚拙に恥ゝ今度ハえものぐんなむ

竹取翁物語紹附録

此巻ゝハ此物語に似ようゝやる古事にゝ解に引出べき事ゝ言ゝぬゝ〳〵て漏しつるゝをも記しゝるまゝ

田中大秀　撰

◎　竹中に人を得ゝふ

廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經序品ゝいゝく。爾時衆中有金剛手菩薩摩訶薩頂禮釋迦牟尼如來合掌恭敬白佛言世尊今此塔中諸如來等從何而有從何而來佛言汝今諦聽當爲汝說乃往古昔不可思議無量無數阿僧祇劫此贍部洲中多諸人衆安穩豐樂五穀不種自然成熟人無彼我亦無積貯當此之時無有佛名有一大山名寶山王彼寶山中有三仙人一名寶髻二名

金髻菩薩三名金剛髻彼三仙人繫心專念佛法僧寶復作是念我等何時證無上正覺度脱一切諸衆生等時彼仙衆作是念已須臾默念復起前念由是念故即證慈悲歡喜一切衆生種々樓閣三摩地獲於天眼觀彼上方見淨居天復於空中有聲言曰善哉正士善哉正士能發無上願求大正覺汝曾聞不有大妙法名廣大寶樓閣祕密善住陀羅尼往昔如來已曾演説善爲利益一切衆生諸有聞者決定不退無上正覺云々此陀羅尼有如是等無量無邊不可思議力時彼仙人得法歡喜欣慶踊躍於其住處如新醍醐消沒於地即於沒處而生三竹七寶爲根金莖葉竿梢枝之上皆有眞珠香潔殊勝常有光明往來見者靡不欣悦生滿十月便自裂破一一竹内各生一童子顔貌端正色相成就時三童子亦既生已各於竹下結跏趺坐入諸禪定至第七日於其夜中皆成正覺其身金色三十二相八十種好圓光嚴飾時彼三竹一一變成高妙樓閣云々

○此經今ハ菩提流支三藏の譯せる黄檗山本を出しつ河社に引きたるハ不空三藏の譯にて弘法大師の將來られたるなり少し異なれども大抵ハ同じ廣大宝樓閣祕密善住陀羅尼の功徳を説る經にて契冲阿闍梨の云く經にハ男子なるを女子にかへなして是を本據として竹取物語ハ書出せるものと云れし實に然なるべし。これ經今ハ取出て讀誦なども せざめるを等持院殿三十三回忌明德元年四月法華八講の記にハ乃御法と云書に仙洞御所より宝樓閣經に橘の打枝に郭公を添させられて今日の御法に手向ましまししなり當時ハ廣く讀し經なるべらなむ

華陽國志ニ。有竹王者興遯水先是有女子浣于水濱有三大竹流入足間推之不去聞竹中有兒聲持歸破竹得男長有武支遂雄夷狄以竹爲姓植死破竹于野遂成林今王祠竹林是也

○河社ニハ後漢書西南夷傳ナリ夜郎ノ傳ヲ引キ云フ。夜郎者初有女子浣於遯水有三節大竹流入豆間聞其中有號聲剖竹視之得一男兒歸養之及長有才武自立爲夜郎侯以竹爲姓云フハ只聊ノ異ナルニ必同人ナラズ

幽怪錄ニ。鄜延長史有大竹凌雲可二尺圍伐之見內有二仙翁相對曰平生深根勁節惜爲主人所伐言畢乘雲而去夷堅續志

○是ハ赫夜姬ノ升天ニモ同シ右抄ニ引ク

釋氏要覽ニ。甘蔗氏經云昔有轉輪王名大自在子孫相承合有八万四千王最後王名大茅草垂老无子乃委政大臣自剃髮出家衆號王僊極老不能行履諸弟子輩時行乞食遂以草籠盛王僊懸於樹虞虎狼之害也有獵人望見謂是白鳥乃射之死血瀝于地諸弟子歸見師被害卽共殯尸其血瀝之地後時忽生甘蔗二本日久開剖一生童子一生童女太臣聞迎取歸宮養育長成以王種故遂立爲王命氏甘蔗始也トアルハ寶樓閣經ニ似タリ

○下學集ニ。甘蔗顧愷之每食蔗自尾至本曰漸入佳境又曰釋迦爲甘蔗氏也ニ。本草和名ニ。甘蔗之夜反陶景注曰取汁爲沙糖荻蔗楊玄操音狄七卷一名諸柘一名玕堵上音干下音柘已上二名出兼名苑唐頭注ニ按医心食性云和名久美食經云節疏而細一ナリ

佛說奈女耆域因緣經後漢安世高譯ニ。如是我聞一時佛在羅閱祇國云ヘリ坐

中有一比丘尼名曰奈女即從座起整服作禮長跪叉手白佛言世尊我自念
先世生波羅奈國爲貧女人時世有佛名曰迦葉時與大衆圍遶說法坐聞經
歡喜意欲布施顧無所有自惟貧賤心用悲感詣他園圃求乞果蓏當以施佛
時得一奈大而香好擎一盂水并奈一枚奉迦葉佛及諸衆僧佛知至意呪願
受之分布水奈一切周普緣此福祚壽盡生天得爲天后下生世間不由胞胎
九十一劫生奈華中端正鮮潔常識宿命今值世尊開示道眼云奈女禮已還
坐以上耆婆經 佛在世時羅耶黎國羅字耆婆經 國王苑中自然生一奈樹枝
葉繁茂實又加大既有九色香美非凡王寶愛此奈黑字あり自非中宮宮中尊貴
美人不得啖喰と此奈果國中有梵志居士貧富無數一國无雙又聰明博達
戈智超群王重愛之用爲大臣請梵志飯食食一字畢以一奈與之梵志

見奈香美非凡乃問王曰此奈樹下寧有小栽可得乞不王曰大多小栽吾恐
妨其大樹輙除去之卿若欲得今當相與即以一奈栽與梵志梵志得歸種之
朝夕溉灌日日長大枝條茂好三年生實光彩大小如王家奈梵志大喜自念
我家貧賤无數不減於王惟无此奈以爲不如今已得之爲无減王既乃〻取
食之而大苦澀了不可食梵志更大愁惱乃退思惟當是土无肥潤故耳乃掘
取百生之湩乳と以飲一牛復取一牛湩煮之之字なし爲醍醐以灌奈根日日灌
之到至明年實乃甘美如王家奈而樹邊忽復生一瘤節大如手拳日日增長
梵志心念忽有此瘤節恐妨其實適欲所去恐復復恐傷樹連日思惟遲徊未
決而節中忽生一枝正指上向洪直調好高出樹頭去地七丈其抄乃分作諸
枝周圍傍出形如偃蓋葉茂好勝於本樹梵志怪之不知枝上當何所有乃

作桟閣登而視之見枝上偃蓋之中乃有池水既清且香又有衆華彩色鮮明披視華中下と有一女兒在池華水と中梵志抱取帰養之名曰奈女至年十五顔色端正天下无雙宣聞遠國有七國王同時俱来詣梵志所求娉奈女以為夫人梵志大恐怖不知當以與誰乃於園中架一高樓以奈女著上出謂諸王曰此女字あり非我所生自出於奈樹之上亦字あり不知是天龍鬼神女耶鬼魅之物今七主俱来求之我設與一王六王當怒不敢愛惜女今在園中樓上諸王便共字なし自平二字なし議有應得者便自取去非我所制也於是七主口共爭詩と之紛紜未決至其夕夜萍沙王從伏寶中入登樓就之共宿明晨當去奈女白曰大王幸枉威尊接逮近と於我今復相捨而去若其有子則是王種當何所與付と王曰若是男兒當以還我若是女兒便以與汝王則即と脱手金鐶之印以付奈女以是為信便出語群臣言我已得奈女與共と一宿亦无奇異あり故如凡人故不取耳萍沙軍中皆稱萬歳曰我王已得奈女六王聞之便各還去萍沙王去後遂便有娠時奈女勅守門人言若有求見我者當語言我病後日月滿生一男兒顔貌端正兒生則手持針藥裹梵志曰此國王之子而執醫器必醫王也云く名曰耆域云かくて八歳なるとく父王の所に到と德文尸羅王樹を得て從外照内見人腹臓て病を瘥に業を得るか

○奈女耆婆經と題しるるも後漢安世高の譯なるく文を省略ふる聊字の替くるとこるく趣意おのく異ふる吏なし因緣經は耆域と名曰耆婆とくあり此經こそ物語は似ふる處多し○緣此福祚盡生天得為天后下生世間不由胞胎ことあふ赫映姫天女なるの今此士

よ生るゝ不由胞胎に似ふり○披視葦中有一女兒在池葦中梵志抱取帰長養之云々竹取翁竹中に女兒を得て家に帰て養育ふよ同し○柰女顔色端正天下无雙宣聞遠國有七國王同時俱來詣梵志所求娉柰女云々ハ五人の人々赫映姫を得むと志ふふ狀なり○梵志謂諸主曰此非我所生と云るゝ竹取を喚出て女を我に賜と伏拜て手を摺宜々まつゝ自己の不生子なれバ心も不令隨なる事なるゝと云てゝ云るゝよ同し○自出於柰樹之上ハ造麻呂の手に令生ふる子なゝも非ス昔山にて見付ふる子なゝ倍るゝと云と○不知天龍鬼神女耶鬼魅之物と云々變化の人と申なるゝ同し意なゝなと○今七主俱來求之ハ五人の人々の志ひとしなるゝ云に似ふり

○我設與一主六王當怒ハひゝくゝ逢まゝ引ひ絲と云るゝ是を反ゝゝ逢るゝの如し又末に

又柰女生時國中復有須曼女及波曼女亦同時俱生須曼女者生於須曼華中國有迦羅越家常養須曼以爲香囊骨石變忽作瘤節大如彈丸日日長大至如手拳石便卒爆字破見石節之中有聚聚耿耿如螢火射出墜地三日而生須曼又三日成華舒中有小女兒迦羅越取養之名曰須曼女長大姝好及才明智慧亞次柰女爾此字時又有梵志家浴池中自然生青蓮華特加大日日長益長益如五斗瓶華舒中見見中有女兒梵志取養之名曰字波曼女長大又好才明智慧如須曼女諸國王聞此二女顔容絶世交來求娉之二女曰我生不由胞胎乃出草華之中身與凡人不同何豈宜隨世人乃

復嫁耶云々とあり

○此は二女曰我生云昼與凡人不同何宜當世人乃復嫁耶と云る

赫映姫の五人は人々なれども天皇まで逢まゝて終は男をざるとしハ能

似るもの○柰ハ和名抄は。本草云榛子上音内字亦作柰和名兼名苑云

柰以一云加良奈之

楗音速一名掩音掩柰也おふ本草和名は。榛仁謂作柰又有林檎相似而小

椹子名似榛色赤音餘冉反已上二名出崔禹一名楗音速出兼名苑榛一名椁一名掩已上二名和

名奈以一名布奈江頭注は按医心江作以おゝい字書は。柰正韻尼帶切、説文果名

廣韻柰有青白赤三種〻あり○抄は柰女者婆經を引て今ハ柰女者

域因縁經の方を引つ

◎ 物は變化〻〻人はなる

古事記中巻は。昔有新羅國主之子名謂天之日矛是人參渡來也所以參渡來

者新羅國有一沼名謂阿具奴摩此沼之邊一賤女晝寢於昼日耀如虹指其

陰上亦有一賤夫思異其狀恒伺其女人之行故是女人自其晝寢時姙身生

赤玉爾其所伺賤夫乞取其玉恒裹著腰此人營田於山谷之間故耕人等之

飲食負一牛而入山谷之中遇逢其國主之子天之日矛爾問其人曰何汝飲

食負牛入山谷汝必殺食是牛即捕其人將入獄囚其人答曰吾非殺牛唯送

田人之食耳然猶不赦爾解其腰之玉幣其國主之子故赦其賤夫將來其玉

置於床邊即化美麗嬢子仍婚爲嫡妻爾其嬢子常設種種之珍味恒食其夫

故其國主之子心奢詈言妻其女人言凡吾者非應爲汝妻之女將行吾祖之國

即竊乘小船逃遁渡來留于難波此者坐難波之比賣碁曾社謂阿加流比賣神者也

○書紀乃垂仁巻なる都怒我阿羅斯等が夷ハ異傳なり其件の詞な
其神石化美麗童女〳〵なる。靈異記巻下ま。女人産生石以之爲神而齋縁
第卅一〳〵なる條に。美乃國方縣郡水野郷樹見村有一女人姓縣氏也
年迄于廿有餘歳不嫁未通而身懐任胎之三年山部天皇世延暦元年
美濃春二月下旬産生二石方丈五寸一色青白斑一色專青毎年増長
有比郡名曰淳見是郡部内有大神名曰伊奈婆託ト者言其産二石是
我子因其女家内立忌籬而齋往古今来未都見聞是亦我聖朝奇異事
矣猶此神の御夷苔野冊子ま記しつるを可考〳〵なるハ彼天日矛の赤玉ま似〳〵り
山城風土記ま。賀茂建角身命娶丹波國神野神伊可古夜日女生子名玉依
日子次曰玉依日賣玉依日賣於石川瀬見小川遊爲時丹塗矢自川上流下

乃取挿置床邊遂孕生男子至成人時外祖父建角身命造八尋屋竪八戸扉
釀八腹酒而神集〳〵而七日七夜樂遊然與子語言汝父將思人令飲此酒即
擧酒坏向天爲祭分穿屋蓋而升於天乃因外祖父之名号可茂別雷命所謂
丹塗矢者乙訓郡社坐火雷命在
○釋日本紀ま云賀茂別雷命父丹塗矢乙訓坐火雷神社是也亦秦氏
大赤帳者戸上矢者松尾大明神是也松尾大明神者大山咋神用鳴鏑
水傳十二ま載〳〵なるを引つ（坂上用字以下誤字なるべし記）按ま風上記ま向天爲祭〳〵なる天
字ハ矢字を写誤ま〳〵る歟
古事記中巻白檮原宮段に。更求爲大后之美人時大久米命曰此間有媛女是
謂神御子其所以謂神御子者三嶋湟咋之女名勢夜陀多良比賣其容姿麗

美故美和之大物主神見感而其美人為大便之時化丹塗矢自其為大便之
溝流下突其美人之陰登仆其美人驚而立走伊須〻岐伎乃將來其矢置於
床邊忽成麗壯夫即娶其美人生子名謂富登多〻良伊須〻岐比賣命亦名
謂比賣多〻良伊須氣余理比賣故是以謂神御子也

○古事記なるゝ風土記と丹塗矢の男は化ゑつゝ同狀なり又風土
記ハ赫映姫の天は升るも同一類なり

萬葉集巻三

仙柘枝歌三首

靈寐吉志美我高嶺乎險跡草取可奈和妹手乎取　此歌ハ詠仙柘枝歌ゝ
入ゝ〻なるゝ〻今ハ非に一そ脱て此歌の
本の侭なるしつ

右一首或云吉野人味稲與柘枝仙媛歌也但見柘枝傳無有此歌
此暮柘之左枝乃流來者梁者不打而不取香聞將有

右一首

古介梁打人乃無有世伐此間毛有益柘之枝羽裳

右一首若宮年魚麻呂作

懷風藻〻

贈正一位太政大臣藤原朝臣史　五言遊吉野

飛文山水地命爵薜蘿中漆姫控鶴擧柘媛接莫通煙光巖上翠日影濤前
紅翻知玄圃近對翫入松風

太宰大貳正四位下紀朝臣男人　七言遊吉野川

万丈崇巖削成秀千尋素濤逆折流欲訪鍾池越潭跡留連美稲逢槎洲

従三位中納言丹墀真人廣成　五言遊吉野山

山水隨臨賞巖谿豫望新朝著度峰翼夕翫躍潭鱗放曠多幽趣超然少俗塵栖心佳野域尋問美稲津（着誤）

七言吉野之作

高嶺嵯峨多奇勢長河渺漫作迴流鍾地超潭豈凡類美稲逢仙月水洲

○猶此仙女の吏ハ次ニ載る仁明天皇四十御賀の歌ともゝめ、惜なる傳ハ有りしむを今ハ失なひつるまゝ、万葉集ニ解ル古へ吉野ハ里の女仙と成て在しゞ同所ニ味稲と云男川ニ梁打て魚とるニ其仙女柘枝と化て流來て其梁に留まりぬ男ゝ其を取て置ニ麗しく女となりしを愛て相住けるゝと云吏なりと云ゝ玉依比賣丹塗矢と取ゝ床の邊ニ置ひゝるニ似ゝり○柘ハ和名抄ニ毛詩注云桑柘音射漢語抄云豆美蠶所食也

書紀雄略卷ニいゝゝ大泊瀬天皇二十二年秋七月丹波國餘佐郡管川人水江浦嶋子乘舟而釣遂得大龜便化爲女於是浦嶋子感以爲婦相逐入海到蓬萊山歴觀仙衆語在別卷

續後紀卷第十九ニ仁明天皇嘉祥二年三月庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十云ゝ更作天人下拾芥子天衣羅拂石翻琴御菓俱來祗候及浦嶋子暫昇雲漢而得長生吉野女眇通上天而來去等像副之長歌奉獻其長歌詞曰日本及野馬臺能國度云ゝ何志キニノオホニ帝之御世萬代介重祢餘ヒ奉令

榮度栢之枝及由求祀波佛許曾願成志多云大海及白浪開呉常世嶋國成建天
到住美聞見人波萬世能寿遠延倍津故事云語來留澄江能淵介釣世志皇之
民浦嶋子加天女釣良礼來呉紫雲迄引呉片時介将呉飛往天是曾此及常世
之國度語良比呉七日經志加良无限久命有志波此嶋介許曾有介良志三吉野介有志
態志祢天女來通呉其後波蒙讃天晄礼衣著呉飛介支度云是亦此之嶋根及
人介許曾有岐度云那云礼

○紀の文て浦嶋子暫昇雲漢而得長生とゝゝ歌は亀姫を天女釣ら
從來ととゝある傳はるゞゝ○万葉の左注は味稻。詩は美稻と書
ふるハ宇方志祢と訓べきを此哥ゝハ熊志祢とよめる。又此仙女後
に天に升しの文は吉野女昧通上天而來且去とらひ哥は乃後衣著
ゝ飛去きゝと云とあり

冊後國風土記釋紀は引ゝに云く與謝郡本冊波和銅六年割日置里本作
量集解改作置和名抄冊波國五郡始置冊後國
ゝ与射郡日置郷あり此里有筒川村此人夫日下部首等先祖名云筒川嶼
子爲人姿容秀美風流无類斯所謂水江浦嶼子者也昔舊宰伊類部馬養連
所記无相乖故略陳所由之旨長谷朝倉宮御宇天皇御世嶼子獨乘小船汎
出海中爲釣經三日三夜不得一魚乃得五色龜心思奇異置于船中卽寐忽
爲婦人其容美麗更不可比嶼子問曰人宅遥遠海庭人之詎人忽來女娘嶼
咲對曰風流之士獨汎蒼海不勝近談就風雲來嶼子復問曰風雲何處來女
答曰天上仙家之人也請君勿疑乘相談之愛愛嶼子知神女慎懼疑怪女娘
語曰賤妾之意共天地畢俱日月極但君奈何早先許不之意嶼子答曰更无

死言何觸乎女娘曰君宜迴棹赴于蓬山嶼子從往女娘敎令眠目即不意之間至海中博大之嶋其地如敷玉闕臺榭朕樓堂玲瓏目所不見耳所不聞携手徐行到一大宅之門女娘曰君且立此處開門入內即七竪子來相詣曰是龜比賣之夫也亦八竪子來相詣曰是龜比賣八之夫也茲知女娘之名龜比賣乃女娘出來嶼子語竪子等曰女娘曰其七竪子者昴星也其八竪子者畢星也君莫怪焉即立前引道進入于內女娘父母共相迎揖定座于斯稱說人間仙都之別談議人神偶會之嘉乃雪百品芳味兄弟姊妹等舉坏獻酬隣里幼女等紅顏戲接仙哥家亮神儛婆迓其爲歡冥萬倍人間於茲不知日暮但黃昏之時群仙侶等慟〻退散即女娘獨留雙肩接袖成夫婦之理于時嶼子遣舊俗遊仙都既經三歲忽起懷土之心獨戀二親故吟哀鬱發嗟歎日益女娘問曰此來觀君夫之貞異於常時願聞其志嶼子對曰古人言少人懷土死狐首岳僕以虛談今斯信然也女娘問曰君欲歸乎嶼子答曰僕近離親故之俗遠入神仙之堺不忍戀眷輒申輕慮死望甍還本俗奉拜二親女娘拭淚歎曰意等金石共期萬歲何眷鄉里棄遣一時即相携徘徊相談慟哀遂接袂退去就于岐路於是女娘父母親族俱悲別送之女娘取玉匣授嶼子謂曰君終不遺賤妾有眷尋者堅握匣慎莫開見即相分乘船仍敎令眠目忽到本土筒川鄉即瞻眺村邑人物遷易更无死由爰問鄉人曰水江浦嶼子之家人今在何處鄉人答曰君何處人問舊遠人乎吾聞古老等相傳曰先世有水江浦嶼子獨遊蒼海復不還來今經三百餘歲者何忽問此乎即銜弃心雖迴鄉里不會一親既送旬日乃撫玉匣而感思神女於嶼子忘前日期忽開玉匣即未瞻之

間芳蘭之體率于風雲翩飛蒼天嶼子即玉櫛期要還知復難會迴首踟躕咽
淚俳徊于斯拭淚哥曰
等許余弊尓、久母多智和多留、美頭能蒼能、宇良志麻能古賀、計等母知多
留、弊字本〻幣と作るを今改久字父と誤まり下皆同し
蒼ハ睿字を誤まり結句誤脱あり〻讀得べ〻
又神女遙飛芳音哥曰
夜麻等弊尓、加豆布企阿義天、久母婆奈禮、所企遠理等母與、和遠和須良
奈、第四句の與字後人の加〻この結句良の下須字を脱きり此哥古
事記高津宮段ま天皇吉備國ま行幸し時黒日賣の獻哥なり其ま
ハ第二句尓斯布岐阿宜呂、結
句和礼和須礼米夜と有り
嶼子更不勝戀望哥曰
古良尓古非、阿佐乃遠比良企、和我遠礼波、等許與能波麻能、奈美能遠等
企許由、遠等の遠字假字格〻のへり
後時人追加哥曰
美頭能蒼能宇良志麻能古我、多麻久志義、阿氣受阿理世波、麻多母阿波
麻志、
等許與幣尓、久母多知和多留、多由女久女波都賀、未等和礼曾加奈志企、
第三第四句誤字脱字あり〻讀えず
○始の歌拭淚哥曰〻何まで〻。嶼子の歌〻〻聞えず必後人の作な
るべし。大和物語の津國ま處女墓の改ま其男女ま代〻〻人〻歌よ
めふ同類なり〻○本朝神仙傳釋紀卷十二右の傳れ次ま引き大氏同樣なり〻文と約く記きりまハ逢
人問之曰云漸過百年ま浦島子傳類從百三十五の卷ま載まハ不値七世之孫

云々とある續浦島子傳記類從同巻ハ古老口傳而經數百歳傳來語曰云々とある寫本の後紀ハ淳和天皇天長二年今歳浦島子帰郷雄畧天皇御宇入海至今三百四十七年也云々とあり書紀通證ハ谷響集曰舍人親王撰日本紀者在養老八年先天長二年者過一百歳焉是知云天長二年者得非不誓之失乎本朝神仙傳云百年而帰此説爲是云々とある万葉集巻九ハ詠水江浦島子歌一首弁短歌を載せ是等大同小異あり其歌ハ墨吉之岸尓出居而釣船之得乎良布手湯多布の誤この云々見者古之事曾所念水江之浦島兒之云々とある浦島子傳ハ忽至故郷澄江浦とあるを神仙傳ハ水江浦人也とあるハ誤この橘翁云墨吉ハ與謝郡ハも在なるべし水江ハ氏ハ墨吉とハ異なりと云ふ。大秀按に

風土記ハ日下部首等先祖と云ふを思へば水江ハ所謂字なるべしの廣博物志未本書を見ず譯抄ハ引用するを云々ハ唐土の義與云ふ所ハ吳堪と云人在り若くて縣の吏となり其ハ家ハ荊溪と云川ハ近のりき或時其河邊ハて大なる螺を得ふり取て帰て家に置るハ急に美麗なる女ハ化ぬ吳堪よろこびて已ハ妻として住り人名ハ螺婦といふ縣ハこのこと是を聞て彼女を思ひいのるもして得ずと思ひ吳堪を呼て云やう世ハ蝦蟆毛と云物あなり其捉て来たりハ汝ハ妻と參らせよと責徵ハ吳堪家に帰て云ふ愁ふれハ螺婦ハ云ふ其ハ甚易き事なり大なる蝦蟆ハ毛生たるを捉来て與へつ悦ばかりに許ハ詣て奉けまバ守ハ云く此度ハ鬼の臂をと乞ぬ吳堪ハ妻ハ談合ハ是も易き

吏〻、速く取來ぬ守是を見るに誠に懼〻き鬼の臂なりと見つ斯世に
なき物を云ふ從ひ〻も〻来れば守ぜんこの物を〻て思煩く此度は聞も
おぼえぬ物をと思く詞ぶをして聞分ぬ物やうの禍斗をもてなすと云け
と家に帰く又この〻云るは如何ふ為ましさてを如何なる物ぞ〻問へば
螺婦ぞこの云く遠き國の獸なりと云く是をる須臾の間ふ取來つ守此獸を
見るく唯尋常ふ犬ふ異更ぬし禍斗くはいかぞと云へば答く申さく
此獸は火を食物くて火の屎を送ると云へば守さく〻ばくて火を令食
ふさるぬこの〻食く暫く〻火の屎を放るふ其火頻く燃着くそく〻ふ屋
ぬもく〻焼ふ焼く守ふ一家ふ人〻も皆悉焼死るさるぬ螺婦は天ダ
ふ類ふことと語傳しるる

○螺婦ぞこのことは龜姫ふ似るもり又世ふなるもふ乞る此物語ふ似るもり

扶桑略記卷第廿二 残缺第六冊 ふ善家秘記云余寛平五年出爲備中介時有賀
夜郡人賀陽良藤者頗有貨殖以錢爲備前少目至于寛平八年秩罷居住本
鄉葺守其妻洛奔入京良藤鰥居於一室忽覺心神狂乱獨居執筆諷吟和歌
如有挑女通書之狀或時有與女兒通慇懃之辞然而不見其形如此數十日
一朝俄失良藤所在擧家尋求遂無相遇良藤兄太領豊仲弟統領豊蔭吉備
津彦神宮祢宜豊恒及良藤男左兵衛志忠貞等皆豪富之人也皆謂良藤狂
悖自捨其身悲哽懊惱求其屍所在然猶無遇俱發願云若得良藤死骸當造
十一面觀世音菩薩像即伐栢樹與良藤形躰長短相等向之頂礼誓願如此
十二日良藤自其宅藏下出來顔色憔悴如病黄癉者又其藏无柱唯石上居

折〻下去地纔四五寸曾不可容身而良藤心情醒寤話云鰥居日久心中常念與女通接於是女兒一人以書着菊華云公主有愛念主人之情故奉書通慇懃即開書讀之艶詞佳美心情搖蕩如此往反數度書中有和歌迦唱和彼遂以餝車迎之騎馬先導者四人行數十里許至一宮門老太夫一人迎門云僕此公主家令也公主令僕引丈人於是從家令入門屏間其殿屋帷帳綺餝甚美須臾薦珍饌未盡備日暮即入燕寢終成懷好意愛纒密雖死無恨晝則同筵夜則併枕比翼連理猶如疎隔遂生一男兒〻聡悟狀貌美麗朝夕抱持未嘗離膝下常念改長男忠貞為庶子以此兒為嫡子此為其母之貴也居三个年忽有優婆塞持杖直昇公主殿上侍人男女皆盡逃散公主又隱不見優婆塞以杖突我背令出狹隘之間顧而視之此我家藏桁下也於是家中大小大怪即毀藏而視之狐數十散走入山藏下猶有良藤座臥之處良藤居藏下纔十三个日也而今謂三年又藏桁下纔四五寸而今良藤知高門縮形出入其中又以藏下令如太殿帷帳皆是狐之妖惑也又優婆塞者此觀音之變身也太悲之力脫此邪妖而已其後良藤無恙十餘年〻六十上死とかゝり

○浦嶼子ゞ龜姫ゞ誘なゝ仕ゝ仙宮ゞ入しと此良藤ゞ狐ゞ通接と相似ゝり嶼子ハ百年と三年と思ひ良藤ハ十三日と三年と思ひしと長と短し仙短と長きる　妖仙術と妖惑と共ゞ奇怪〻きゝ〻ゞゞ

○猶霊異記上巻第三条ゞ尾張國阿育知郡片葩里の農父ゞ前ゞ墮ちる雷小兒と成しゝと元興寺迦場法師の傳なり　又同巻第二条ニ美濃國大野郡の人狐ゞ女ゞ化まゝと妻とせし事などゝのゝまゝ今ハ畧つ

◎妻問ふこと

古事記上巻に故此大國主神之兄弟八十神坐云、其八十神各有欲妻稻羽之八上比賣之心共行稻羽時於大穴牟遲神負帒爲從者率往白兎の段を畧於是八上比賣答八十神言吾者不聞汝等之言將嫁大穴牟遲神故尒八十神怒欲殺大穴牟遲神共議而至伯伎國之手間山本云赤猪の麓又根堅洲國の段を畧故其八上比賣者如先期美刀阿多波志都

同記中巻に故其天之日矛持渡來物者玉津寶云而珠二貫又振浪比礼切浪比礼振風比礼切風比礼又奥津鏡邊津鏡并八種也此者伊豆志之八前大神也故茲神之女名伊豆志袁登賣神坐也故八十神雖欲得是伊豆志袁登賣皆不得婚於是有二神兄弟秋山之下氷壯夫弟名春山之霞壯夫故其兄謂其弟吾雖乞伊豆志袁登賣不得婚汝得此孃子乎答曰易得也尒其兄曰若汝有得此孃子者避上下衣服量身高而釀甕酒亦山河之物悉備設爲宇礼豆玖云尒其弟如兄言具白其母即其母取布遲葛而一宿之間織縫衣褌及襪沓亦作弓矢令服其衣褌等令取其弓矢遣其孃子之家者其衣服及弓矢悉成藤花於是其春山之霞壯夫以其弓矢繫孃子之廁尒伊豆志袁登賣思異其花將來之時立其孃子之後入其屋即婚故生一子也尒白其兄曰吾者得伊豆志袁登賣於是其兄慷慨弟之婚以又償其宇礼豆玖之物尒愁白其母之時御祖答曰我御世之事能許曾神習又宇都志岐青人草習乎不償其物恨其兄子乃取其伊豆志河之河嶋之節竹而作八目之荒籠取其河石合鹽而裹其竹葉令詛言如此竹葉青如此竹葉萎而青萎又如此鹽之盈

乾而盈乾又如此石之沈而沈臥如此令詛置於畑上是以其兄八年之間于
萎病枯故其兄患泣請其御祖者即令返詛戸於是其身如本以安平也

○伊豆志袁登賣ハ伊豆志大神の女とゐるを思へど是も彼八種け
玉津寶の男ま化〳〵今産ゐ〳〵ふる〳〵彼丹塗矢まふ天日矛の玉など
の同様なる來由も有しなるべし是ハ明宮段の末ま載まれども甚
上代け更ゐるべし

同記下巻伊波礼之甕栗宮段ま意富祁命袁祁命播磨國より宮ま上ま〳〵
事を記〳〵て次ま故天下ちろしめまむとする間に平群臣の祖名ハ志毘
臣歌垣ま立〳〵袁祁命け之さ〳〵する美人の手とられ其孃子ハ菟田
首等の女名ハ大魚と云て袁祁命も歌垣ま立〳〵て歌ひゐる〳〵

潮瀬の波折を見けで遊〳〵る鮪の鰭手ま妻る〳〵り見ま
是ま志毘臣ま〳〵ひたる〳〵
大宮け彼をとつ鰭手すとかゝぶり
かゝ歌ひ〳〵其歌の末をとふ時ま袁祁命ま〳〵ひゐる〳〵
於ゐ〳〵ふ〳〵をどりなとこそずとこのゝぶられ
介ま歌ひゐる〳〵
おゐきとけ心をゆ〳〵み臣け子の八重け柴垣入ゐ〳〵あ
介志毘臣いよ〳〵念〳〵歌ひけ〳〵
大君の〳〵こけ志ぞこのゝ八節ぞまふり結もらし き経け柴垣やけ
ぞこのゝ

尓ヨ王子まる歌ひくまはく

おほを大鮪をよし鮪つ海人よ、さづの荒ばこの心行しけむ鮪つ

如此うつひ闘明てつけまねけめ意富祁命袁祁命二たし

可議ふまハ凡朝廷の人どもハ且ふん朝廷ヨ參ヨ畫ハ志毘臣の門ヨ

ばふかれ今て志毘必い孫ふむ其門て人もなるむ故今なべハ謀

難なて謀て即軍と與して志毘臣の家を圍て殺ふひき

○師の古事記傳巻四十三ヨ云抑上件哥垣ヨ贈答し賜へる哥ども此

記書紀共ヨ傳の紛れ誤ヨ見て或ハ作者易ヨ或ハ次第乱ヨ或

て脱ふる所念きなと穏なべる叟共の互ヨ考ヨ今能考正さむ

てばて思巡らして心の及べる限ハ云ばども猶惜ヨて決め

難き叟共もつるを猶ヨて考べき叟なりと云ばき。今ハ其次第を改

らばるヨ從一假字ヨ書つるてなり

萬葉集巻第一に中大兄命三山御歌

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代從如此尓有良之古昔母

然尓有許曽虚蟬毛嬬乎相挌良思言、

反歌

高山與耳梨山與相之時、立見尓來之伊奈美國波良、

○此大御歌ハ天智天皇太子ヨ御くしまて時播磨國ヨ幸まて

神集てふ所て其處の故叟を聞しめて作ばるなり其古事ハ

播磨風土記ヨ出雲國阿菩大神聞大和國畝火香山耳梨三山相鬪以

此謌諫山欲諫止の誤のと云　上來之時到此處乃聞闘止覆其所乘之船而坐之
故号神集之覆形〻〻〻〻

同集巻第九ゟ詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌

鶏鳴吾妻乃國尓古昔尓有家留事登至今不絶言來勝牡鹿乃真間乃手
兒奈我麻衣尓青衿着直佐麻乎裳者織服而髪谷毋掻者不梳履乎谷不
着雖行錦綾之中丹裹有齋兒毛妹尓将及哉望月之滿有面輪二如花咲
而立有者夏蟲乃入火之如水門入尓船已具如久歸香具禮人乃言時幾
時毛不生物乎何爲跡歟身乎多名知而浪音乃驟湊之奥津城尓妹之臥
勢流遠代尓有家類事乎昨日霜将見我其登毛所念可毛

反歌

勝牡鹿之真間之井見者立平之水挹家年手兒名之所念

○猶此叟をよゝる巻三ゟ山部赤人ゟ長歌短歌三首　ゟ巻十四ゟ下
總歌二首　ゟ

同集巻第十六ゟ昔者有娘子字曰櫻兒也于時有二壯士共詐此娘而指生
搏競貪死相敵於是娘子歎欲曰從古來于今未聞未見一女之身往適二門
矣方今壯士之意有難和平不如妾死相害永息尓乃尋入林中懸樹經死其
兩壯士不敢哀慟血泣漣襟各陳心緒作歌二首

春去者挿頭尓将為跡我念之櫻花者散去流香聞去下家字を脱きるか

妹之名尓繫有櫻花開者常哉将戀弥年之羽尓

傳ゟ同巻ゟ或曰昔有三男同娉一女也娘子嘆息曰一女之身易滅如露三

雄之志難平如石遂乃彷徨池上沈没水底於時其壯士等不勝哀頽之至各陳所心作歌三首 娘子字曰鬘兒也

無耳之池羊蹄恨之吾妹兒之來作潛者水波將涸

足曳之山縵之兒今日徃跡吾尓告世婆還來麻之乎 還ハ迦の誤

足曳之山縵之兒如今日何隈乎見管來尓監

○手兒名櫻兒縵兒を戀する男の多き赫映姫に似たり

大和物語百卅二段に昔津國にすむ女ありけるそこに其をとこ男二人なむ有けふ一人く其國に住男姓ハ菟原になむありける今一人を和泉國の人にて姓ハ茅沼になむ云ける かくて其男ども年齢顔形人ならひど唯同し計なむありける志の勝らまほしくこそ逢めと思ふに心差のほど唯同

やうなり暮ぬハ請共に來ぬひぬ物遣ぬハ唯同やうにて何を勝ぬ

とと云ばくもあるべく女思煩ひぬ此人に心ざしぬ疎なるべく何ぬ

逢まじかれど是も彼も月日を經て家の門に立て萬に志を見てけるで

志ひぬ是よりも彼よりも同やうにて物ども取も不入ど色に

に持てり親ありてかく見苦しく年月を歴て人の歎をいとどしく

負もいとほしひしかく逢なバ今一人の思ハ絶なんと云に此にも

さまでもに人の志に同やうなるに思煩ひぬるさまぬいとすぢ

にと云に當時生田川のほとりに帝を打まうけりかくて其ならぬ人

ぬとを喚にやりて親に云やう誰も御心ざしの同やうなるバ此をそ

よもなん思煩ひて徒に今日何に此事を定てん或ハ遠き所に

まつはれる人あり或ハ此などのさま其勞かぎりなし是も彼もいづれまさらぬ態なりと云時に甚かしこく悦びあへるを申さんと思ひつるやうハ此川に浮て侍る水鳥を射たまへ其を射中たまへらん人にあはせたてまつらむと云時に甚よき事なりと云て射るほどに一人ハ頭の方を射つ今一人ハ尾の方をいつ其時いづれと云べくもあらぬに女思ひわづらひて

住わびぬ我身なげてむ津の國の生田の川ハ名のみなりけりとよみて此ひらばりハ川にのぞみてかかりければづぶりと落入ぬれば親あわてゝ騒きのゝしる間に此よばふ男二人やがて同所に落入ぬ一人ハ足をとらへ一人ハ手をとらへて死けり其時親いみじく騒ぎ取上て泣のゝしりて葬るに男どもの親も來にけり此女の塚の傍に又塚ども造て掘埋む時に津國の男の親云やう同國の男をこそ同所にハせめこと國の人のいかで此國の土をば侵べきと云て妨る時に和泉の方の親や和泉國の土を舟に運て此にもて來てなむ遂に埋てけるされバ女の墓をば中にて左右になん男の墓ども今も在なるかゝる事どもの昔在けるを繪に皆かきて故后宮に奉ければ是が上を皆人々此人に代てよみける伊勢の御息所

影とのみ水の下にてあひ見れどたまなきからハかひなかりけり

女に成かはりて女一の宮

限なくふかく沈める我魂ハうきたる人に見えむものかは

又こや

いづこゝの魂をもとゝめあつまりかゝとゝも思ほえなくゝ

兵庫の命婦

はるのよゝ諸くもゝゝで契けるかゝゝそ人は見えぬ物のゝ

糸所のゝゝ

勝負もなくゝてやさて玉君はとゝり思ゝゝぬる山ハこゝ面ゝ

いきゝつりしをりよりの女はなることて

逢ゝゝよりのゝとゝるゝゝふなるよ竹の立るゝゝふと聞ぞかなしに

又人

身を投ゝかゝるゝと人はちきゝゝ絲どゝに身ハ水はかなとなゝゝ

又今ひゝゝりよりの男はなりて

おなじ江ゝ住ハゝゝゝゝ中なるまゝとゝ我ゝゝとゝ契らぎりけゝ

かゝゝゝ女

ゝゝりけゝ我ゝなゝゝゝと大ゝるハかゝふ契のなゝゝゝゝゝうぐ

又一人の男はなりて

我ゝゝとちきゝゝびなゝゝ同し江は住ハ嬉しきみぎゝゝゝ思ふ下畧

○此故更をよめる万葉集巻九は過葦屋處女墓時作歌一首弁短歌

二首卅三

のひゝ　はゝ見菟原處女墓歌一首弁短歌二首卅五丁　はゝ巻十九は大

伴家持卿の追和處女墓歌一首弁短歌ありゝ古ゝ語傳へる更ゝゝ今

も猶其墓ありゝゝ。巻九の上は長歌は古之益荒丁子各競妻問為祁

年下なるは虚木綿乃窄而座在者見而師香跡悒憤時之垣廬成人

之詠時云々とかり此物語は帳の内よりも出さじ云々赫映姫を得てしの形見てしのなく云々をを不離君ぶち夜を明し日を暮す人多の物云云其中は猶云けるを云々五人々かるる似ふり此大和物語文々は此吏を略りり此長哥じるに生田川の水鳥を射しこそこそ宍串呂黄泉尓將待跡云々血沼壯士其夜夢見取次寸追去祁礼婆々みるを思へば處女の死し後は壯士く慕行しなり巻十九なるに離家海邊尓出立云々節間毛惜命乎露霜之過麻之尓家礼々かるは海は身を投こそこそ死つ〜めとるはば水鳥の叟は後は面白〜作加ふる物語なるべし此女身を投こそこそてよめる歌も古き調はあ〜べ伊勢の御なるは彼男女の意は成てよるはし如〜後人は追加ふるなるべし

萬葉集巻第九は詠上総末珠名娘子一首并短歌

水長鳥安房尓繼有梓弓末乃珠名者胸別之廣吾妹腰細之須輕娘子之其姿之端正尓如花咲而立者玉桙乃道行人者已行道者不去而不召尓門至奴指並隣之君者預已妻離而不乞尓鎰左倍奉人乃皆如是迷有者容艶縁而曽妹者多波礼弖有家留

反歌

金門尓之人乃來立者夜中毋身者田菜不知出曽相來

○是等はいとゞ猶多のはぶきつ

◎佛の御石鉢

普曜經西晉昼法護訳巻第七上鉢品は曰〜尓時提謂波利之等与賈人俱五百為

侶於時樹木華實茂盛演佛定意七日不動不搖時有梵天厥名識乾住于梵天見佛新得道快坐七日未有獻食者我當求人令飯上佛即使五百賈人皆躓不行識乾先世五百賈人之知識也欲度之故故使然矣提謂波利驚怖而還与衆共議諸天即時而說偈言

如來成佛道　所願已具足　汝等貢上食　因是轉法輪

時五百人詣樹神所梵作神現光像分明言今世有佛在拘留國界尼連禪水邊未有致食者汝曹宜先能有善意必獲大福賈人聞佛名皆大喜言佛必獨大尊天神所敬非凡品也即和麨蜜俱於樹下稽首上佛佛念先古諸佛哀受人施法皆持鉢不宜加餘道人手受食也時四天王於頻那山上得四枚青石之鉢欲於中食時有天子名曰照明謂四王曰今者有佛名釋迦文應用斯鉢非人之器今當受食可往奉之於是四王即与天子華香妓樂幡蓋并鉢如帛臂頃俱下詣佛四天王各取所持之鉢共貢上佛佛念取一不快餘人意當悉納之提頭賴王先以獻佛佛即受之而為說偈言

今授世尊器　當獲尊法器　自得寂然鉢　心意无忌共

時毘留勒王次復奉鉢佛即受之而為說偈言

若授如來器　其心未曾忘　天王安護　乃至清淨覺

時毘留羅又王次復奉鉢佛尋受之而說偈言

其施清淨器　淨心授如來　身心常輕便　天龍神所歎

時毘沙門王次復奉鉢佛即受之而說偈言

佛戒无缺漏　授完牢之器　信施无乱心　使德无缺減

佛受鉢已累左手中右手按上即合成一令四際現而復歎曰

吾前世施鉢　故有是果報　今獲斯四器　四王神足致

佛歎偈已即以其鉢受賈客密呪願文とかるる大品般若經卷第一奉鉢品より佛告舍利弗若菩薩摩訶薩行般若波羅蜜能作是功德是時四天王皆大歡喜意念言我等當以四鉢奉上菩薩如前天王奉先佛鉢とある大智度論卷第三十五より釋して云く四天王奉鉢四鉢義如先說問曰佛一身何以受四鉢答曰四王力等不可偏受一人又令見佛神力合四鉢為一心喜信淨作是念我等從菩薩初生至今成佛所修供養功德不虛文とかりとぞ

○是ハ專念寺了恩法橋了向しのび抄出て示さるる

◎　龍の珠とりし事

大平廣記より奇傳を引て曰く貞元中周邯買奴善入水如履平地多探水底金銀寶玉歸曰水精訪相州刺史王澤州北八角井且暮煙雲翳鬱漫衍晦夜有光如火相傳金龍潛其底澤曰此當有至寶但無計究之邯乃命水精水精忻然脫衣沈之良久而出曰黃龍鱗如金抱數顆明珠熟寐得一利劍當斬之澤取寶劍與之水精仗劍而入忽見水精自井面躍出續有金手長數百丈爪甲鋒頭自空拏攫水精却入井去節錄

梁四公記より洞庭山洞穴梁武問杰公公曰此穴通枯桑島東岸東海龍王女掌珠藏龍畏蠟愛美玉及空青而嗜燕若遣使可得寶珠於是洛黎縣羅子春請使乃求茅君所貫龍腦香於陶弘景以千鬲美玉造二小函宣州空青汰其精者以蠟塗子春身資燒燕五百枚入洞穴至龍宮獻龍女龍女食之大嘉以大珠三小珠七雜一石報之杰公曰

三珠一是天帝如意珠二珠是驪龍玉七珠是海蚌珠也上者夜光照四十里中十里下一里節錄云云是より龍玉云云る法も有るなりけり御行大納言の此記は心ばせの所ざりしいと所をしのりけふ夷と秦翁右二書を抄出し云云云云

◎ 南海

大伴大納言は舟南海に吹着られ甚く懼のしてみ所のしは故ある云云なり此の文高く書る也菅原梶成の傳低きは其證なり續後紀の文なり文德天皇實錄卷第五に云

仁壽三年六月辛酉侍醫外從五位下菅原朝臣梶成卒梶成右京人也業練醫術寂解處一作劇一作瘧療承和元年從聘唐使渡海朝廷以梶成明堅醫經令其請問疑義

續後紀卷三に仁明天皇承和元年正月庚午任遣唐使以參議從四位上右大辨兼行相模守藤原朝臣常嗣爲持節大使從五位下彈正少弼兼行美作介小野朝臣篁副使判官四人錄事三人とゝゑ也かくて船を造る三年五月壬子五の十四丁に四船難波を出同年七月二日太宰府を出しのゞも漂迴して破ふる船を修理て四年七月癸未六の十二丁に奏に三箇の船出しを又逆風に遇て第一第四の船は壹岐島に第二の船は値嘉島に流着て五年七月甲申七の九丁の奏に第二船進發をるよし奏しふれども八月戊子十丁遣唐使表到來云云常嗣等言云臣等捧戴顛倒涯分不次云云云云大使の船は進發される由なり一四等の船は吏紀に漏ふり五年春解纜着唐岸

五年春解纜とあるを紀は不合ことと上は論ずるこの如し。承和三年五月難波を船出しくかくして五年の秋の中ごろ唐岸に着の後あけの。當時海路は安うぐりし更車持皇子はそぐを大伴大納言はあをひあをひあをひ青反吐はひあをひ

七年夏歸本朝路遭狂飈

六年八月己巳八の十七丁 勅太宰大貳從四位上南淵朝臣永河等得今月十四日飛驛奏遣唐錄事大神宗雄送太宰府牒狀知大唐三箇船嫌木船之不完倩駕楚州新羅船九雙傍新羅南以歸朝其第六船宗雄所駕是也餘八箇船或隱或見前後相失未有到著艱虞之變不可不備宜每方面戍防人不絶炬火纔貯糧水令後著船共得安穩癸酉十八丁 上奏入唐大使藤原朝臣常嗣等帰著之由云云甲戌勅云云得今月十九日奏狀知遣唐大使藤原朝臣常嗣等率七雙船廻著肥前國松浦郡生屬嶋与先到錄事大神宗雄船捻是八艘宜依例勞來式寛旅思云云又未到第二船并一雙船復能覘候來輒奏聞

漂落南海風浪緊急敲舶艫俄而雷電霹靂桅子摧破天晝黑暗失路東西須臾寄著一島不知何島島有賊類傷害數人梶成殊祈願佛神儻得全濟與判官良岑長松等合力即採集破舶材木造一船共載尒時便風引舶得著此岸

七年二月癸丑九の八丁 上奏云云四月庚申九丁 勅云云得今月八日飛驛奏狀知遣唐知乘船事菅原梶成等分駕一雙小船廻着大隅國海畔梶成等漂入異域万死更生久言苦節誠可矜恤迄于入都依舊勞來量賜布帛以資衣裳

又准判官良岑長松所駕之船全否未期鬱陶于懷宜諭戒邊面無絶候伺若有來着併得安穩〻ゝの文德紀ゝハ梶成長松等合力造一船得着此岸〻ゝるを違ふくいの〻〻

南海の一島ま漂著て鬪戰ゝる〻〻ハ六月己酉十八丁遣唐第二船知乘船事正六位上菅原朝臣梶成等海中遇逆風漂著南海賊地相戰之時去承和六年八月三日より十餘日の間なる〻〻下の文ゝ〻ゝ所得兵器五尺鉾一枚片蓋鞘横佩一柄箭一雙賫來獻之並不似中國兵仗〻ゝの〻

三代實錄卷十一ゝ清和天皇貞觀七年十月廿六日雅楽擢大允外從五位下和邇宿祢大田麻呂者右京人也吹笛出身備於伶官茹師吏雅楽權小屬外從五位下良枝宿祢清上受學吹笛清上時善吹笛音律調弄皆窮其妙見大田麻呂有氣骨可勵習因加意而教之承和之初清上役聘唐使入大唐歸朝之日船遭逆風漂蘆南海賊地為賊所殺本姓大戸首河内國人大田麻呂能受其道〻〻ゝあり其のこと藤原貞敏遣唐准判官承和二年十月庚寅任ゝ〻琵琶を傳〻歸ゝられ〻〻を六年十月己酉天皇御紫震殿に令貞敏彈比巴ゝ〻ゝ〻ゝ清上ゝ笛を傳ゝ〻て入唐ゝ〻ゝられ〻ゝ幸ゝて此災ゝに遇ゝ〻ゝハ惜むべ〻〻悲むべ〻〻

其時神の御助ありし吏ハ七月己亥九の廿八丁奉授出羽國飽海郡正五位下勲五等大物忌神從四位下餘如故兼宛神封二戸詔曰天皇我大御詔旨尓坐大物忌大神尓由賜波須皇朝尓縁有物恠天卜詢尓大神為祟賜倍利加以遣唐使第二船人等廻來申久去年八月尓南賊境尓漂落氐相戰時

彼衆我寡氏力甚不敵奈儻而克敵留利似有神助止申今依此事氏臆量尓
去年出羽國言上太留大神乃於雲裏氏十日聞作戰聲後尓兵石零利止大神
乃威稜令遠被太留事乎且奉驚異且奉歎喜故以從四位爵乎奉授兩戸之
封奉宛良久申賜波久申以の上曼字脱の乎ハ止の誤なり出羽國より言上し事ハ六年
十月乙丑ハの廿五丁出羽國言去八月廿九日菅田川郡司解偽此郡西隈遠
府之程五十餘里李自無石而從八月三日霖雨無止雷電鬪聲經十餘日
乃見晴天時向海畔自然隕石其數不少或似鏃或似鉾或白或黒或青赤
凡厥壯體銳皆向西莖則向東詢于故老所未曾見國司商量此濱沙地而
徑寸之石自古無有仍上言者其所進上兵家之石數十枚收之外記局勅
曰陸奥出羽并太宰府等若有機變隨宜行之且以上言克制權変令凞不

虞又轉禍爲福佛神曼先宜修法奉幣と見えたり詔詞ハ十の下餘字を脱さり
此靈異今世ハも猶遺て不絶例なりけり其ハ近江國山田里木内重
曉ゞの著きる雲根志と云書ハ記しるしたる或人の語ハるやう、和泉
國なる旭峯法師ゞ云く出羽國ハ神軍と云吏なりて毎年月日ハ不定の聞漏
つ鏃石とふ〳〵鳥海山の麓神の森ハ邊なる矢島と云濱なり其始
西北の海面當時ハ南海なるハ今西北方なるハ不審し松前の方に當て三四丈許ハ十五
六丈ばかりの綿と積ふるゞの如き白雲海中より涌出て五七日も不動
ふるてり是毎年の例なり此雲ゝ出ればゞ即津輕侯ハ告あるゝすなゞ
頭十人歩人五百人と賜てりて十手ハ分まて常ハ弓ハ青竹の箭を
多く矧貯置て彼濱ハ到て十組ハ備を立てとゝとのなく海の方

より彼白雲を差て射放てゝなり斯く雷なり地震やり雨風をげしく
御社の内も甚く震動て濱邊ハ沙を吹あゝて目口開べくもあらぬ
を念じてひたすらに射放つ態とする夷書袁といふべき津輕城へ七
里餘も隔てゝなれど其響なかくとゝろみてゝなり斯て二三日ありして
晴そしハ五七日も不止夷あり漸く雨風をさまり空霽てゝ常
の狀となれバ皆退てゝ其跡ハ彼鏃石多く隕てゝを身の守と
やて拾ひゝなり此濱一里餘ハ廣さハ三里餘の地ハ草木も小石
もなく甚白く米粉の如き細砂のゝなり其御神ハ大物忌大神ゝ申
なりゝ此法師ハ出羽人ハくく其夷よくく知ゝ語ぬゝゝ當時ゝゝあれ
ハ落て苦しむ人も无なれハ不用なる神軍のやゝゝハあれど狄此
神御稜威を示て外國の賊を防ぎよ神心なるあゝしまして加斯

世ハ奇しく妙なる神夷を今誠ハ靈異しく夷なれで梶成主の傳ハ
に行ひめよゝゝゝ有らめ
因ハ委ゝるしつ

此神社ハ神名式ハ出羽國飽海郡大物忌神社名神大　小物忌神社ゝなり
貞觀四年十一月乙丑朔詔出羽國正四位上勲五等大物忌神預官社
ゝゝゝ猶增位のゝゝ正史ハ載られゝり
朝廷嘉其誠節十年爲鍼博士次爲侍醫卒於官ゝゝゝゝゝゝ此夷を語傳へ
ゝゝゝゝの人南海く甚もゝ恐懼しく地ゝ思居てるなりけゝ

◎　男をゝりし人

書紀卷第七ハ大足彦忍代別景行天皇四年春二月甲寅朔甲子天皇幸美濃
左右奏言之茲國有佳人曰弟媛容姿端正ハ坂入彦皇子之女也天皇欲得

為妃幸第媛之家第媛聞乗輿車駕則隱竹林於是天皇擢令第媛至而居千
泳宮鯉魚浮池朝夕臨視而戯遊時第媛欲見其鯉魚遊而密來臨池天皇則
留而通之爰第媛以為夫婦之道古今皆則也然於吾而不便則請天皇曰妾
性不欲交接之道今不勝皇命之威暫納帷幕之中然意所不快亦形姿穢陋
久之不堪陪於掖庭唯有妾妹名曰八坂入媛容姿麗美志亦貞潔宜納後宮
天皇聽之

○第媛一度ハ色ゝ恐ひしのび姉君ヨ讓ラ〳〵再度御婚ヨ〳〵。源
氏物語の宇治宮ハ御女子ハ此を摸寫して御姉妹互ヨ取替ゝるも
のなり猶此一段の叓ハ千村仲雄主の泳宮考ヨ委説ありるを見へし

三代實錄卷第三ヨ清和天皇貞觀元年八月十日尚侍從三位當麻真人浦
虫薨時年八十浦虫者右京人也父正六位上繼麻呂ヨ浦虫為人貞和早標
美譽未嘗適於人遂不知伉儷之道自掌宮人之職脩禁内之禮式

大和物語百卅八段に故御息所の御姉ぬい子ヨ御ひらふなん甚ちゝ
らゝゝく歌よこゝろよ叓も第人ゝち御息所よりも勝てなきいよびゝる
けゝる若き時ヨ女親ハ云ゝひよりゝと繼母乃手ヨ在ありけまゝ心ヨ物ヨ
不叶ぬ時も有りさてよみゝるまひらふ
在さてぬいのちまつ間の程ゝこのり憂事ゝゝなげうゝるが邪とな
ほよこゝろよりゝる梅花を折〳〵又
かゝふ香ヨ秋も加ゝゝびゝるひさゝく春戀してふれゝのこをもしやと
讀ゝゝりけふ甚よしゝまゝくをこの〳〵在ありゝゝよゝゝ人も甚多の

[illegible]ど返事もせずうけ[illegible]女と云もは終よかく[illegible]
[illegible]時〻返事さ[illegible]と親も繼母も云けるバせあ[illegible]
[illegible]云やうける

扨も[illegible]かひなのるべき忍ばれなる人のこゝろ[illegible]と
[illegible]云やう〻物も不云[illegible]かく云ふ心ざし[illegible]親など男婚さ[illegible]
云[illegible]ど一生に男をでやこなんと云う[illegible]よ[illegible]もこ云けるさらひ
けるもさる〻男もせで廿九[illegible]

○此御息所誰〻も知ざ[illegible]バ其御姉なる考べきよしなし

◎月おこやこ

起世經ないく〻佛告比丘月天子宮殿縱横正等四十九申旬四面垣墻七
寶所成月天宮殿純以天銀天青瑠璃而相間錯二分天銀清淨無垢光甚明
曜餘一分天青瑠璃亦甚清淨表裏映徹光明遠照亦爲五風攝持而行亦云
於此月殿亦有大輦青瑠璃成輦高十六申旬廣八申旬月天子身與諸天女
住此輦中以天種〻五欲功德和合受樂隨意而行月天子身壽五百歳子孫
相承皆於彼治〻

龍城錄ないく〻開元六年上與申天師、道士鴻都客八月望日夜因天師作術、
三人同在雲上遊月中過一大門在玉光中飛浮宮殿往來無定寒氣逼人露
濡衣袖皆濕頃見一大宮府榜曰廣寒清虛之府其守門兵衛甚嚴白刃粲然望
之如凝雪時三人皆止其下不得入天師引上皇起躍身如在烟霧中下視玉
城崔嵬但聞清香藹欝下若萬里瑠璃之田其間見有仙人道士乘雲駕鶴往

來若遊戯少焉步向前覺翠色冷光相射目眩極寒不可進下見有素娥十餘人皆皓衣乘白鸞往來舞笑於廣陵大桂樹之下又聽樂音嘈雜亦甚清麗上皇素解音律熟覽而意已傳頃天師亟欲帰三人下若旋風忽悟若醉夢中迴介次夜上皇欲再求往天師但笑謝而不允上皇因想素娥風中飛舞袖被編律成音製霓裳羽衣舞曲自古洎今清麗無復加於是矣

◎ 天の羽衣

坂士佛の康永元年大神宮參詣記より外宮御鎮座より支を記し〻次より右一首奉讃外宮天照豊大神歌也〻左より記をる長歌あり〻次より（豊の下受字をもちきり）

反歌一本短歌〻

處女子之友介別而、天原、振蘿津久流、昔悲聞、第四句誤字有一一一首の意解えび

右一首奉題豊宇賀能賣神歌也

むかし丹波國ある川邊より天女八人降〻水を浴〻遊びり一人の老翁是を見〻數多の天女ら中に一人衣を取かくし天女是より騒〻皆飛去ぬ衣隠されたる天女歎〻衣をこふ翁ら云〻我子なし願ハ此國より留〻我子と成れ〻〻〻更に衣を返さば天女力及〻で翁の子となりぬ養父の家ら貧〻き支を隣ら〻酒を造〻賣より此酒を一椀を服をれバ百病悉瘥是より依〻諸乃宝を馬車に積て送る程より富貴ら家と成りけり其後翁天女を厭心ありもりまで翁より向ひ〻其意を問ふ程より翁羹をなく申けれで天女是を恨〻天上より昇らもるすれで天の羽衣より別〻飛行の德を失なひ下界より住すと可れバ養育の翁より厭まて起居ら處なし常に蒼天

を仰ぐも伴なひし處女を見えず泣く白屋に臥すも憐む人稀なり昔を恐ひ今を悲しく讀るもひりくふ

天原振離見者霞多地家路麻余伊呂行敝不知聞（述の伊字假字拾ふべし）

此天女と神明御迁座の時御供申て丹波國より當國へ遷ぬる天女なり泣居たる所を奈久郡云々

○此記凡古仏をとゝ古書に違ふ事多し山故事外宮儀式帳

も不所見こゝに本ハ何の書より出るのとゝ次より引る搜神記

に甚能似たる事なり

搜神記に豫章新喩縣男子見田中有六七女皆衣毛衣不知是鳥人匍匐往

得一女所其解毛衣取藏之即往就諸鳥諸鳥各飛去一鳥獨不得去男子取

以為婦生三女其母後使女問父知衣在積稻下得之衣而飛去後復以迎三

女女亦飛去と抄

○ 天に升る

靈異記上卷第十三條に大和國宇太郡淳部里有風流女是即彼部内淳部造麻呂

之妾也天年風聲為行自性塩醤存心七子産生極窮无食无便為衣綴藤日

日沐浴潔身著綴毎於野採菜為事常住於家淨家為心採調盛唱子端坐含

咲馴言致食常以昼行為身心業彼氣調恰如天上客昼難波長柄豊崎宮時

甲寅年其風流事神仙感應春野採菜食於仙草而飛於天誠知不修佛法而

好風流仙薬感應如精進女問經云居住俗家端心掃庭得五功德者其斯謂

之矣

○上ヨ引ケル藤原史公の遊吉野と云る詩ハ漆姫控鶴擧と云るハ此故更なるべし此傳ヘハ崔の更なるべ彼詩を考ヘハ崔ハ乘て天ヨ昇し傳も有けるこ○猶加茂大神ヨリ捜神記の鳥女なるも相合ひたり

◎ 今昔物語ヨ載る此物語并諸書ヨ異説

今ハ昔。。天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要ズル人ニアタヘテ其功ヲ取テ世ヲ渡ケルニ翁籠ヲ造ランガタメニ筐ニユキ竹ヲ切ケルニ筐ノ中ニ一ノ光アリ其竹ノ中ニ三寸バカリナル人アリ翁是ヲ見テ思ハク我年來竹取ツルニ今カヽル物ヲ見付タルヿヲヨロコビテ片手ニハ其小人ヲ取片手ニハ竹ヲ荷ウテ家ニ帰テ妻ノ嫗ニ筐ノ中ニテ此女子ヲコソ見付タレト云ケレバ嫗モ悦テ初ハ籠ニ入テ養ケルニ三月バカリヤシナヒケリ例ノ人ニナリヌ其子ヤウ〳〵長大スルヽニ世ニナラビナク端正ニシテ此世ノ人トモ覺ザリケレハ翁嫗イヨ〳〵是ヲカナシミ愛シテ傅ケル間ニ此世ニ聞エタカク成ニケリ而間翁亦竹ヲ取ランガ為ニ筐ニ行ヌ竹ヲ取ニ其度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付タリ翁コレヲ取テ家ニ帰ヌ然レバ翁忽ニ豊ニ成ヌ居所ニ宮殿樓閣ヲ造テ其レニ住ミ種〳〵ノ財庫舎ニ充チ満テリ眷屬衆多ニ成ヌ亦此兒ヲ儲テヨリ後ハ事ニ觸レテ思様ナリ然レバ弥ヨ愛シ傅ク〻无限シ而ル間其時ノ上達部殿上人消息ヲ遣テ假借シケルニ女更ニ不聞ケレバ皆心ヲ盡シテ云セケルニ女初ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ將來レ其時ニ會ハ

ムト云ケリ次ニハ優曇華ト云花有ケリ其レヲ取テ持来レ然ラム時ニ
會ハムト云ケリ後ニハ不打ヌニ鳴ル鼓ト云物アリ其レヲ取テ得サセ
タラン折ニ自ラ聞エムナド云ウテ不會ザリケレバ假借スル人〻女ノ
狀形ノ世ニ不似微妙ナリケルニ躭テ只此ク云ニ隨テ難堪キ事ナレド
モ旧ク物知タル人等ニ可求キ叟ヲ問ヒ聞テ或ハ家ヲ出テ海邊ニ行或
ハ世ヲ捨テ山ノ中ニ入リ此樣ニシテ求ケル程ニ或ハ命ヲ亡シ或ハ不
返來ヌ輩モ有ケリ而ル間天皇此女ノ有樣ヲ聞シ食シテ此女世ニ並無
ク微妙シト聞我レ行テ見テ実ニ端正ノ姿ナラバ速ニ后トセムト思シ
テ忽ニ太臣百官ヲ引將テ彼翁ノ家ニ行幸アリケリ既ニ御ヽシ着タル
ニ家ノ有樣微妙ナル王ノ宮ニ不異ズ女ヲ召出ルニ即參レリ天皇此

レヲ見給ニ実ニ世ニ可譬者無ク微妙ナリケレバ此我ガ后ト成ラムト
テ人ニハ不近付ザリケルナメリト喜ク思シ食テヤガテ具シテ宮ニ返
テ后ニ立テムト宣フニ女申サク我レ后トナラムニ無限キ喜ビ也トイ
ヘドモ実ニハ已人ニハ非ヌ身ニテ候也ト天皇宣ク汝チ然ラバ何者ゾ鬼
カ神カト女ノ云ク已鬼ニモアラズ神ニモ非ズ但シ已ヲハ只今空ヽリ
人来テ可迎キ也天皇速ニ返ラセ給ヒ子ト天皇此レヲ聞給テ此ハ何ニ
云事ニカ有ラム只今空ヨリ人来テ可迎ニ非ズ此レハ只我ガ云叟ヲ辞
ビムトテ云ナメリト思給ケル程ニ暫許有テ空ヨリ多ノ人来テ輿ヲ持
来テ此女ヲ乗セテ空ニ昇ニケリ其迎ニ来レル人ノ姿此世ノ人ニ不似
リケリ其時ニ天皇実ニ此女ハ只人ニハ無キ者ニコソ有ケレト思シテ

宮ニ返リ給ニケリ其後ハ天皇彼女ヲ見給ケルニ実ニ世ニ不似形有様微妙ナリケレバ常ニ思シ出テ破無ク思シケレドモ更ニ甲斐無クテ止ニケリ其女遂ニ何者ト知ル無シ亦翁ノ子ニ成ル叟モ何ナル叟ニカ有ケム惣テ不心得ヌ事也トナム世ノ人思ケル此ル希有ノ叟ナレバ此ク語リ傳タルト也

○右の物語大こゝ同さまゝ異なる處すくなし（此書いまゝ元本を不見抄ま引ふ）

るを写つ書ざまも大方其侭なれど假字多く続けゝ処もしつ（）女始ニハ空ナル雷ヲ捕ヘテ将来レ云ハ霊異記上巻第一條ま小子部栖輕者泊瀬朝倉宮廿三年治天下雄略天皇謂大泊瀬稚武天皇之隨身肺脯侍者矣天皇磐余宮之時天皇與后寐大安殿婚合之時栖輕不知而忝入也天皇耻輙當於時而空雷鳴即天皇勅栖輕而詔汝鳴雷奉請之耶荅曰将請天皇詔曰尓汝奉請栖輕奉勅從宮罷出緋蘰著額撃赤幡桙乗馬從阿部山田之道与豊浦寺之路走往至于輕諸越之衢躡請言天鳴雷神天皇奉請呼云云然而自此還馬走言雖雷神而何所不聞天皇之請耶走罷時豊浦寺与飯岡間鳴雷落在栖輕見之即呼神司人入饗饗而持向於大宮奏天皇言雷神奉請時雷放光明炫天皇見之恐偉進幣帛令還落處其落處今呼雷岡在京小治田宮者然後栖輕卒也天皇勅留七日七夜詠彼忠信雷落同處作彼墓収立碑文柱言取雷栖輕之墓也此雷思念而鳴落踊踐於碑文柱彼之折間雷搆所捕天皇聞之放雷不死慌七日七夜留在天皇勅使樹碑文柱標言生之死之捕雷栖輕之墓謂古京時名為雷岡語本昔也〻ゝ

此事雄畧紀にハ七年秋七月丙子天皇詔少子部連蜾蠃曰朕欲見三
諸岳神之形汝膂力過人自行捉來蜾蠃荅曰試往捉之乃登三諸岳捉
取大虵奉示天皇天皇不齋戒暫見之其雷虺虺目精赫赫天皇畏蔽目
不見却入殿中使放於岳仍改賜名爲雷 すかるの名を雷と改めしなり 暫見之の三字畧記に從ひて補
とつてくるへり○優曇華の事ハ玉枝の段にいひき○不打ヌニ鳴ル鼓
ト云物ハ法花經 妙音菩薩品 に百千天樂不鼓自鳴とある觀无量寿経 六觀 に
有无量諸天作天伎樂又有樂器懸處虛空如天寶幢不鼓自鳴
詞林採葉抄にいはく古老傳曰此山麓垂馬里有老翁愛鷹嬢飼犬後作
箕爲業竹節間得少女容貌端嚴光明照耀爰桓武天皇御宇延暦之比諸國
下宣旨被撰美女坂上田邑麻呂爲東國勅使富山裾老翁宅宿終夜不絶火

光問子細是養女光明也云田邑麻呂即上洛奏事之由於是少女登般若山
入巖崛畢帝幸老翁宅翁奏由緒帝悲泣脫帝王冠留此處登頂上臨金崛少
女出向微笑曰願帝留此帝即入崛訖玉冠成石在于今彼翁者愛鷹明神也
嬢者飼犬明神也 已上 今考之云當山緣起之上者仰雖可信用之時代甚不
審也疑若天智天皇欤彼帝近江宮ニテ崩玉フトイヘド実ハ不然白地ニ
御馬ニ名テ出マシテ隱玉フ所ヲシラズ宇治山ノ麓ニ御鞋片落コレヲ
取テ山陵ニ籠タテマツル鞋石トテ長三尺許有之富士金崛ヘ入玉フハ
此帝欤可詳鴨長明巡歴記ニ云 要取 此山ノ傍ニ採竹翁ト云者アリ宅後ノ竹
林ニシテ鶯ノ卵子ヲ得タリ養テ子トス少女トナリテ身ノカタハラヲ
テラス百媚アリ見人斷腸聞者心ヲ動ス是ヨリシテ青竹ノ中ニ黄金出

来テ貧翁忽ニ富人トナリニケリ英華ノ家好色ノ道月卿爭光雲客重光
艶言ヲツクリ戀懷ヲ抽ヅ時ノ帝叡聞ニ達ヨビテ御狩遊ノ由ニテ姫ノ
竹亭ヘ幸アリテ鶯ノ契ヲムスビ松ノ齢ヲヒキ玉フ竹姫後日ヲ契リ申
ケレハ帝空ク返玉フカタヘノ天昆ヲシリテ飛車ヲ出シテ迎テ天ニ昇
リヌ鶯姫帝ノ御契ノサスガニ覺テ不死ノ藥ニ歌ヲ書副テ留テケリ其
歌ニ云
今ハトテアマノ羽衣キル時ゾ君ヲアハレトオモヒイデヌル
帝御返歌
逢コトノ泪ニウカブ我身ニハシナヌ藥モナニヽカハセン
勅使智計ヲメグラシテ富士ノ嶺ニ登テ此藥ヲ燒アゲヽリト仍テ此山

ヲ不死山ト云ケルヲ郡ノ名ニ付テ富士ト申ケルナリ已上〻〻有〻〻
○古老傳の説ハ此山と称るハ富士山なり是ハ此物語を附會して
桓武天皇ゟ御叟と申なるべし○今考之と云るハ詞林採葉の説
なるべし疑若天智天皇歟と云るもひゞのこゝとなる叟云も更なり富
士の金嶋ゟ入ゟふハ此帝歟と云るも由なゟ叟なり此天皇の崩御
し時の叟書紀ゟ万葉集なる歌ゟも見えて明なるを○鴨長明
の巡歷記の説ハ此物語を片端ひゞのゝく傳ゟるを聞ゟるなるべし
大秀按ゟ此物語ひろ〻〻ハ此書を不見〻〻暗記ゟ〻語傳ゟ〻區〻に
なゟるゟゟり已ゟ幼ゟるし時山深き地ゟり出ゟる老人の今昔
物語なるゟゟ談ゟるを髣髴ゟみゞも此老人ハ一文不通ゟ者ゟて古

〻聞傳〻るを談ける中ニ宇治拾遺なる鬼ニ瘤〻〻〻るものよ
又雀の子やしなひ〻徳得しハ今も女童の語ぶるを聞つ長明も此
本ハ未見で談傳〻るを聞つふのとなるべし
國名風土記ニいと〻甲斐國トハ昔ハ富士山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ竹ヲ
種テアキナヒケル者アリ彼翁園生ノ竹林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ暖
タ置ク其後程ヲヘテ昼ヲミレバ容顔優ナル龍姫ト成ケリ然ルニ彼ヲ
養子トスタケシ後ニカノ翁ガ田作ケル時ニ暇ナカリシカバ養母ノ訟
ヘテイハク隙ナキ時ニシモ何トカヤ手助トナリ玉ハザルト情ナク云
ケレバ鶯姫コレニ怒ヲナシテ富士山ノ峯ニ登テ岩ヲ蹴破テ湯ヲ走ラ
カシ田ツクル人ノ所ミナ焼石トナル件ノ祖父母ハニゲテ白根ガ峯ヘ
ユキ又彼田カケル馬モニゲテ信州駒ガ三子ニスミケル其駒主ヲワス
レズ常ニ馴シカバ彼馬ヲ心ニ入テ飼シユヱナリ此所ヲ飼國ト云然ヲ
カナガキニ甲斐トカクナリ黒駒ト云モ甲斐國ヨリイヅルナリ
○これ國名風土記と云ふ書ハ大いに〻〻なる妄説なり〻〻取すべ
〻〻ぬ物なり文亀年中ニ妙小路基綱中納言の書ける物ニ此記
の飛騨國の条を引れ〻ハ其すりハ古き文なり
此説ハ古老傳を〻〻〻偽きしるの欤

◎不死藥

本草和名第十六巻ニ

不死藥廿一種　黄玉芝黄蓋三重　海中紫菜海人石上　人威芝如人赤色　天精芝
青垂玉葉　伏苓芝狀如牛角　牛精芝青筌青黛　不死芝青蓋四支　銅芝蓋如觀色黄赤

126
6
104

海石榴油 在海嶋中 似安石榴

石決明 附石生海中

科玄丹芝 赤玉女 黄蓋

神芝 黄蓋 黒裏 葛瓦 是等日月所光処無不生但人所不審耳已上廿一名出崔禹

赤松芝 狀如人 色赤

黒土芝 黒玉蓋 五重茎

火蓋芝 赤蓋 黒莖

金神芝 白蓋 黒茎

木精芝 赤光 青蓋

鳥父芝 赤蓋 玉茎

白玉芝 白蓋 白茎

銀末 生大隈之莫 土

夏精芝 方蓋 三子

(ﾏﾏ)猶不死藥の麦本文ゴ註は見えず

竹取翁物語解巻首

文政十一年歳次戊子三月切畢

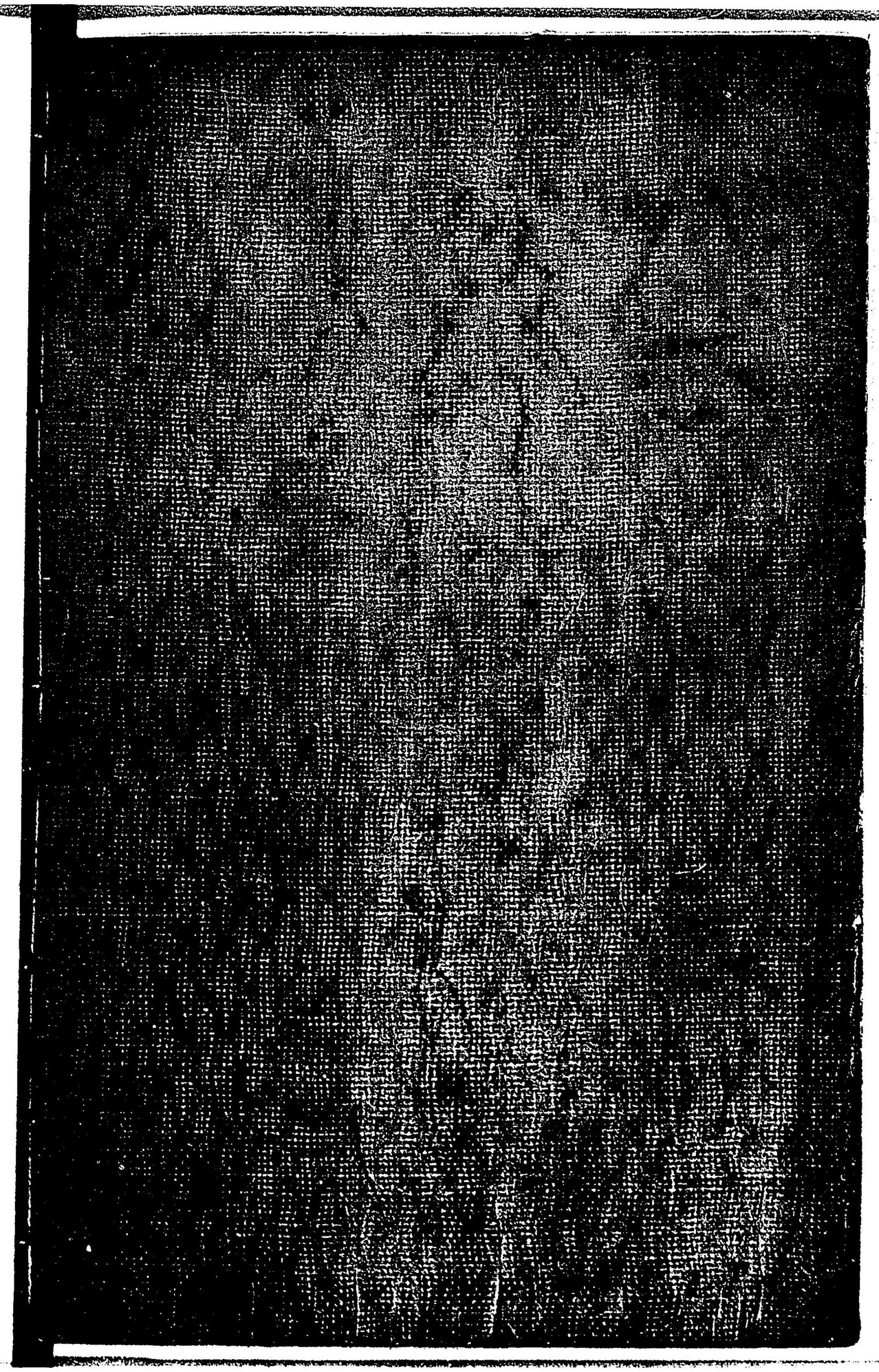
田中大秀著併書

山崎弘泰

長瀬俊香 同校

名古屋
大曽根 松屋平兵衛藏版書目

往橋閑月画圖 伊勢參宮名所圖會 大本八冊
此書は一圖一覧の物にあらず京都より近江國を經て伊勢參宮の紀行委曲一宮諸神社佛閣名所の殿堂にいたるまで圖畫を加へ一書也
源華紅華堂主人著編
同 柳雪亭春先生畫圖
扶桑皇統記圖會 前編 六冊 後編 七冊
同
此書は人皇四十代天武天皇の御治世より六十代醍醐天皇の御宇までの公事の根元宮社寺院の草創代々の人物の行録を記す所謂役者安部仲麻呂吉備大臣衣通姫光明皇后瓦弁僧正弓削道鏡惠見押時中將姫傳教大師弘法大師田村丸浦島が子小野篁在原行平業平小野小町菅正通貞菅丞相其外故人の實傳を探り精く詳録し悉く圖畫を加へ一盡覽之書也
近江名所圖會 三冊 改正 新刻
四書 後藤點 十冊 改正 大字
四書 道春點 十冊 改正 新刻
大學 後藤點 一冊
同 中庸 同 一冊

新刻 中庸 道春點 一冊
改正 論語 後藤點 四冊
新刻 論語 徽訓約覽 五冊
孟子 後藤點 四冊
頭書 大學 平假名付 一冊
改正 四書 假名付 一冊
本註 小學 二冊
增註十八史略 七冊
文章 徽論 二冊
古文 孝經 一冊
新撰字林玉編 一冊
漢語 字解 一冊
日本地名字類 一冊
四書 字引 一冊
八月 改正 小學讀本字解 一冊
明治新撰早字引 一冊
改正 補 早引節用集 一冊
懐中明治節用集 一冊
普通讀本字解 一冊

法令 必携 新聞字引 一冊
田中 小學 讀本字解 一冊
高國史略字解 一冊
五月 改正 小學讀本字解 一冊
小學 必携 習字帖字引 一冊
宗門無盡燈論 二冊
槐安國語 五冊
同 骨董稿 二冊
禪林句集 二冊
冠禪 門實訓 二冊
四部之錦 二冊
禪林玉編 二冊
毒語 註心經 一冊
普賢 碧巖集 十冊
六祖壇經 一冊
盤珠門關 一冊
法眼禪師十規論 一冊
普勸座禪儀 不能語 一冊
宗門葛藤集 一冊
法華初心成佛抄 一冊
普賢行願品宗通略疏 三冊